一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

鳥取県西伯郡伯耆町

野上城跡
三部長龍寺谷タタラ跡

２０１４
一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

鳥取県西伯郡伯耆町

野　上　城　跡
三部長龍寺谷タタラ跡

２０１４
一般財団法人　米子市文化財団

例　　言

1．本報告書は、鳥取県が計画する長龍寺谷川砂防堰堤工事に伴い、平成24年度に西伯郡伯耆町三部地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、米子市埋蔵文化財調査室が実施した。
3．本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系の座標値である。またレベルは海抜標高を示す。
4．本報告書第３図の地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「江尾」（平成６年12月１日発行）を加筆して使用した。
5．調査の実施に当たって、樹種同定と年代測定を㈱古環境研究所に、野上城跡Ｅ区調査後の地形測量をフジテクノ㈲に委託した。
6．本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
7．発掘調査によって作成された図面、写真は米子市教育委員会において、出土遺物は伯耆町教育委員会において保管されている。
8．現地調査及び報告書の作成には、下記の方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

　木村三三男、坂本嘉和、長田康平

凡　　例

1．発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
2．遺跡の略称は、野上城跡が「C-NGM」、三部長龍寺谷タタラ跡が「CRタタラ」である。
3．本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。

　Po：土器、土製品、陶磁器　　S：石製品　　M：金属製品　　W：木製品
4．本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。また、赤色塗彩された土師器は網掛けで表現した。
6．遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器が４分の１、土製品が３分の１、石器が１分の１と２分の１、木製品が４分の１、金属製品が３分の１、ガラス製品が３分の１である。

目　　次

例言、凡例
目次
図版目次

第１章　経過
　第１節　調査の経過 ……1
　第２節　発掘調査の経過 ……1
　第３節　整理作業の経過 ……1
　第４節　調査体制 ……2

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ……3
　第２節　歴史的環境 ……3

第３章　発掘調査の方法と成果
　第１節　調査の方法 ……6
　第２節　調査日誌抄 ……6
　第３節　野上城跡Ａ区の調査 ……8
　第４節　野上城跡Ｂ区の調査 ……9
　第５節　野上城跡Ｃ区の調査……11
　第６節　野上城跡Ｄ区の調査……12
　第７節　野上城跡Ｅ区の調査……16
　第８節　三部長龍寺谷タタラ跡の調査……29

第４章　自然科学分析
　第１節　野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡における樹種同定（株式会社古環境研究所）……32
　第２節　野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡における年代測定（株式会社古環境研究所）……34

第５章　総括
　第１節　野上城跡の調査……37
　第２節　三部長龍寺谷タタラ跡の調査……37

写真図版
報告書抄録・要約・奥付

図 版 目 次

第１図　鳥取県の位置 ……2
第２図　野上城跡の位置 ……2
第３図　野上城跡周辺の遺跡分布図 ……5
第４図　野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡の調査地点 ……7
第５図　野上城跡Ａ区　平・断面図・遺物図 ……8
第６図　野上城跡Ｂ区　平面図・遺物図 ……9
第７図　古墓１　平・断面図……10
第８図　野上城跡Ｃ区　平・断面図・遺物図……11
第９図　野上城跡Ｄ区　平面図……13
第10図　古墓２　平・断面図……14
第11図　古墓２　主体部　平・断面図・遺物図……15
第12図　野上城跡Ｅ区　平面図（第１遺構面）……17
第13図　古墓３　平・立面図……18
第14図　古墓３　平・断面図・遺物図……19
第15図　野上城跡Ｅ−３区　平面図・包含層出土遺物図 ……20
第16図　野上城跡Ｅ−１区　平面図（第２遺構面)……22
第17図　野上城跡Ｅ区　トレンチ断面図（第２遺構面）……23
第18図　野上城跡Ｅ区　郭下層出土遺物図①……24
第19図　野上城跡Ｅ区　郭下層出土遺物図②……25
第20図　土坑１　平・断面図……26
第21図　土坑１　出土遺物図①……27
第22図　土坑１　出土遺物図②……28
第23図　三部長龍寺谷タタラ跡　平・断面図……30
第24図　三部長龍寺谷タタラ跡　断面図・遺物図……31

第１章　経過

第１節　調査の経過

本発掘調査は、鳥取県西伯郡伯耆町三部において計画された、長龍寺谷川砂防堰堤の工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。

今回発掘調査を実施した野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡は、平成22・23年度に長龍寺谷川砂防堰堤の工事予定地内に所在する遺跡について伯耆町教育委員会による試掘調査（註１）が実施され、縄文時代の陥穴や中世墓と見られる石組遺構が検出された。これに基づいて、平成23年度には工事予定地内の南側を対象とした本調査が伯耆町教育委員会によって実施されている。

今回の工事予定地内の調査範囲、約1,000㎡については、平成24年度内における伯耆町教育委員会の事業量が膨大であり、年度内の調査実施が困難な状況であったことから、財団法人米子市教育文化事業団（現一般財団法人米子市文化財団）埋蔵文化財調査室が本調査を実施することとなった。平成24年４月19日付で文化財保護法第92条の第１項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出し、平成24年５月15日に鳥取県西部総合事務所と正式に契約を締結した。そして、平成24年６月25日から現地調査に着手し、平成24年９月31日までに全ての現地調査を完了した。

（註１）2012年　長田康平『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』伯耆町教育委員会

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、工事対象区間の1,000㎡を対象とし、平成24年６月25日から平成24年９月28日までの期間で現地調査を終了した。

発掘調査の範囲は、砂防ダムへの管理道路部分と水路・ボックス工事部に分かれており、Ａ区からＥ区に分けて実施した。現地調査では、急傾斜地が多く重機の使用が困難であったため、安全性の確保が出来る平坦地部分のみ重機を使用し、排土の搬出作業を行った。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。自然科学分析に関しては、樹種同定、年代測定業務を専門業者に委託した。

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成24年度は出土遺物の洗浄、注記作業と実測作業の一部を行った。

平成25年度には、残りの出土遺物の注記、接合作業を行い、実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末までに報告書を刊行した。

第４節　調査体制

平成24年度（2012年度）

事業主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

平成25年度（2013年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団（平成25年４月より名称変更）

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

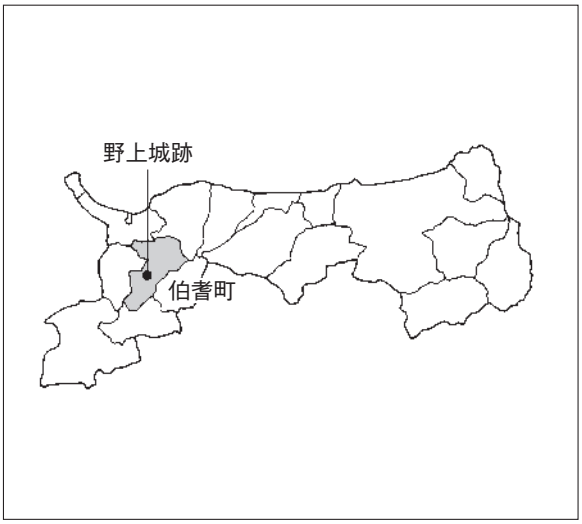
次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

調査協力・指導・助言　米子市教育委員会・伯耆町教育委員会・鳥取県教育委員会

第１図　鳥取県の位置



第２図　野上城跡の位置

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

野上城跡と三部長龍寺谷タタラ跡は、鳥取県の西部、西伯郡伯耆町三部に所在する。伯耆町は、平成17年に日野郡溝口町と西伯郡岸本町が合併して誕生した人口約１万１千人の町である。

三部地区は、伯耆町の野上川と藤屋川の合流地点に位置し、現代の集落は野上川の東西河岸、沖積地上に分布している。三部集落の北西には標高354mの粟津山、南東には標高766mの古峠山があり、三部地区一帯は狭隘な谷地形の平野部に集落が展開しているが、出雲街道が通り、中世より交通の要所として重要な地点であった。

第２節　歴史的環境

旧石器、縄紋時代

野上城跡と三部長龍寺谷タタラ跡は、中世城郭と近世の製鉄遺跡が中心と考えられる遺跡であるが、今回実施した発掘調査では、縄紋時代から現代に至る時期の遺物が出土しており、長期間に亘る人間活動の場であったことを示している。

鳥取県西部地方では、旧石器時代にまで遡る資料は数が少ないが、米子市の長者原台地上に位置している諏訪西山ノ後遺跡から硅岩製のナイフ形石器がローム層中から出土しているほか、伯耆町坂長村上遺跡から黒曜石製のナイフ形石器が１点出土しており、日野川左岸の地域でも後期旧石器時代の遺跡が存在することが裏付けられている。

縄紋時代の遺跡については、鳥取県内では草創期の土器資料が未確認であるが、サヌカイト製の尖頭器が大山山麓の地域を中心に分布しているほか、坂長村上遺跡から５点の尖頭器がまとまって見つかっている。早期の資料は、旧溝口町内の遺跡において、神宮寺式段階から高山寺式段階までの資料が長山馬籠遺跡や井後草里遺跡などで出土しており、早期前葉から中葉にかけての資料は充実していると言えるが、遺構に伴うものは少なく、集落の実態に迫る資料は得られていない。縄紋時代前期の資料は、長山馬籠遺跡や下山南通遺跡から西川津式の資料が出土しているが、前期中葉から後期の資料は減少傾向にあり、集落の実態が明らかではないが、晩期には三部野遺跡など、町内の遺跡でも散見されるようになる。

弥生時代

伯耆町内における弥生時代の集落遺跡は、代遺跡や長山馬籠遺跡など、主に日野川左岸に近接する丘陵上と大山西麓において見られる。弥生時代遺跡の動向としては、前期から中期前半の遺跡は検出された事例が少なく、活発な集落活動は窺えないが、中期中葉から後期にかけて主に丘陵上に展開する集落が急速に拡大し、弥生時代終末期まで存続する事例が多い。

一方、三部地区においては、集落遺跡が確認された事例が無いため実態がよく分からないが、墳墓については、父原地区において四隅突出型墳丘墓が見つかっており、これらの造営母体となった集落

がこの近辺に存在するものと考えられる。

古墳時代

伯耆町内における古墳時代の様相は、前期古墳の実態が明らかではなく不明瞭であるが、中期に至ると、越敷山から長者原台地を中心とした地域に群集墳が展開する。後期には、細見神社古墳などで横穴式石室が作られているほか、宇代横平遺跡からは横穴墓が見つかっている。集落関係では、坂長第８遺跡や坂長尻田平遺跡などで中期の竪穴建物が確認されているが、後期集落の様相は明らかではない。また、『日野郡史』には、三部の中山から粘土の採掘中に大型の横瓶が出土したことが記されており、この付近に窯跡があったことが推測されている

古　代

白鳳期には、旧岸本町大殿に法起寺式の伽藍配置を持つ大寺廃寺が創建されるが、日野郡内では、今のところ古代寺院の確認例は見られない。また、和名抄には日野六郷の記載があり、野上城一帯が古代野上郷の遺称地と考えられる。また、条里痕跡も明確ではなく、日野郡衙跡の所在地についても日野町黒坂近辺に想定されているが、いまだ確認されていない。伯耆町内では、旧岸本町の長者原台地一帯で、会見郡衙跡に関連すると見られる遺跡が多数確認されているほか、下山南通遺跡から平安期の鈩跡が確認されている。

中　世

三部周辺地域における中世の遺跡は、『日野郡史』に三部出土の瀬戸・美濃系陶器皿と碁笥底の青花皿の写真が掲載されており、正確な出土地点は分からないが、中世後半期において三部周辺に貿易陶磁器を出土する遺跡があったことが分かる。また、代遺跡において城郭跡が見つかっているほか、宇代寺中遺跡では、丘陵上の平坦地から２棟の掘立柱建物、中世の墳墓と見られる集石遺構が見つかっている。

近　世

中世末期から近世初頭にかけての西伯耆地方は、吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と頻繁に領主が交代したが、元和３（1617）年には池田光政が鳥取藩32万石を領し、寛永９（1632）年に国替により池田光仲が鳥取藩主となると、池田家筆頭家老の荒尾氏による自分手政治が幕末まで続いた。

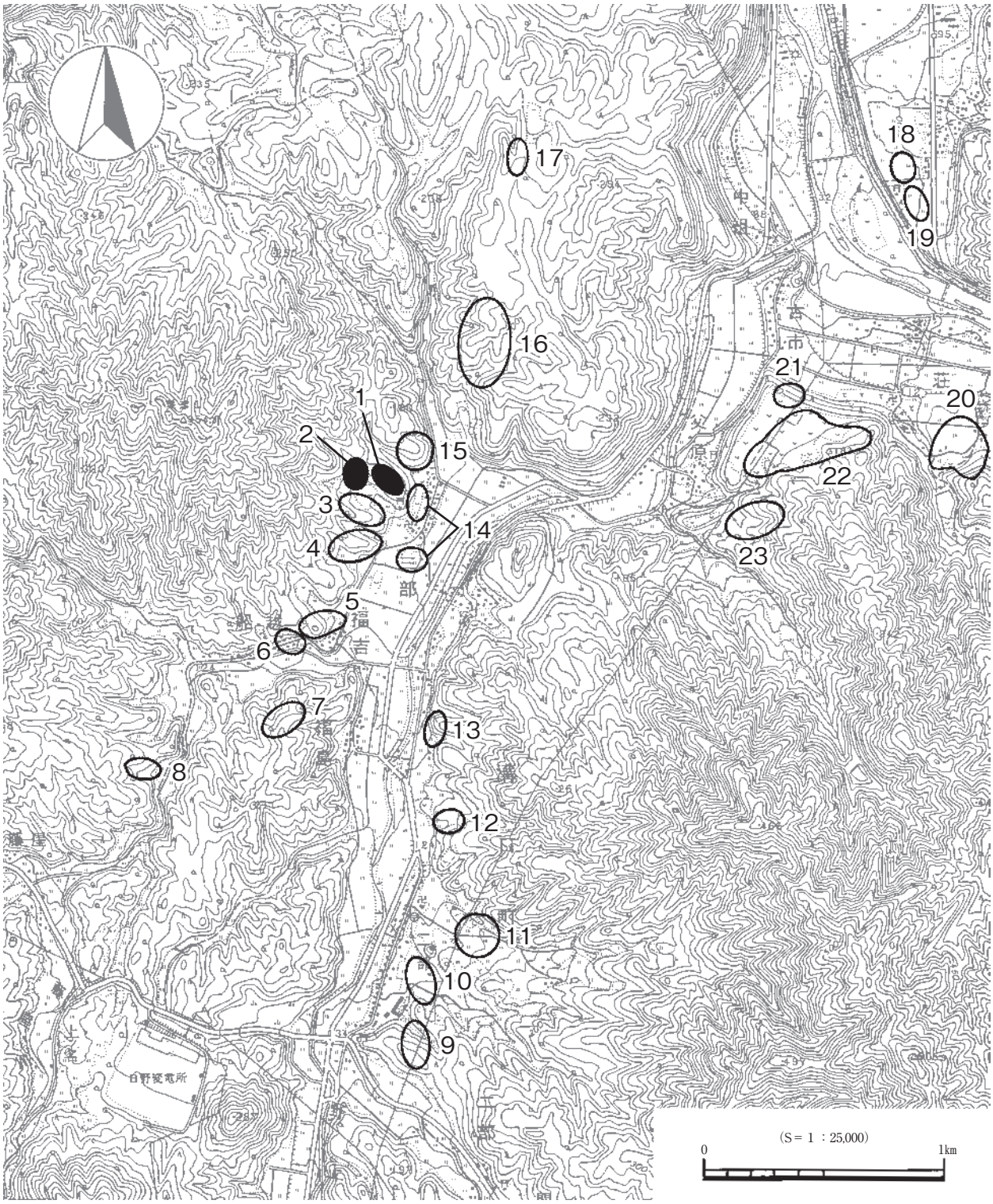
三部では、出雲街道沿いに参勤交代の際に松江藩の家老が利用した脇本陣があり、近くには山奉行所が置かれていた。また、旧溝口町内には50カ所以上の鈩跡の存在が確認されており、大半は近世を主体とするものと考えられているが、上野貝塚鈩跡は大正時代の初期まで、福岡製鉄所は昭和の初め頃まで操業していた。

参考文献

1972年　日野郡自治協会『日野郡誌（前篇）』名著出版

1982年　『角川日本地名大辞典31　鳥取県』角川書店

1996年　米子市史編さん協議会『新修米子市史』第13巻　米子市



第３図　野上城跡周辺の遺跡分布図

1	野上城跡	9	二部上ミ要害	17	三部野遺跡
2	三部長龍寺タタラ跡	10	二部城	18	宮原遺跡
3	三部長龍寺谷遺跡	11	古寺生松城	19	宮原神社古墳群
4	三部ダン遺跡	12	代ノ原遺跡	20	長瀬の前遺跡
5	山下遺跡	13	北谷遺跡	21	下大奈瀬遺跡
6	外構城	14	三部道の下遺跡	22	海蔵寺遺跡
7	福居遺跡	15	中山遺跡	23	父原古墳群
8	福島城	16	中ノ平古墳群		

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査区の設定方法は、砂防ダムの管理用道路の建設により掘削される部分（Ｃ～Ｅ区）と排水路（Ａ区)、ボックスカルバート工区（Ｂ区）を対象とした。各トレンチ内の小区割りは、全て狭小なトレンチ調査のため設定しなかった。また、Ｅ区の西側では、排土置場の確保が難しかったことから、３つのトレンチを設定して調査を行った。

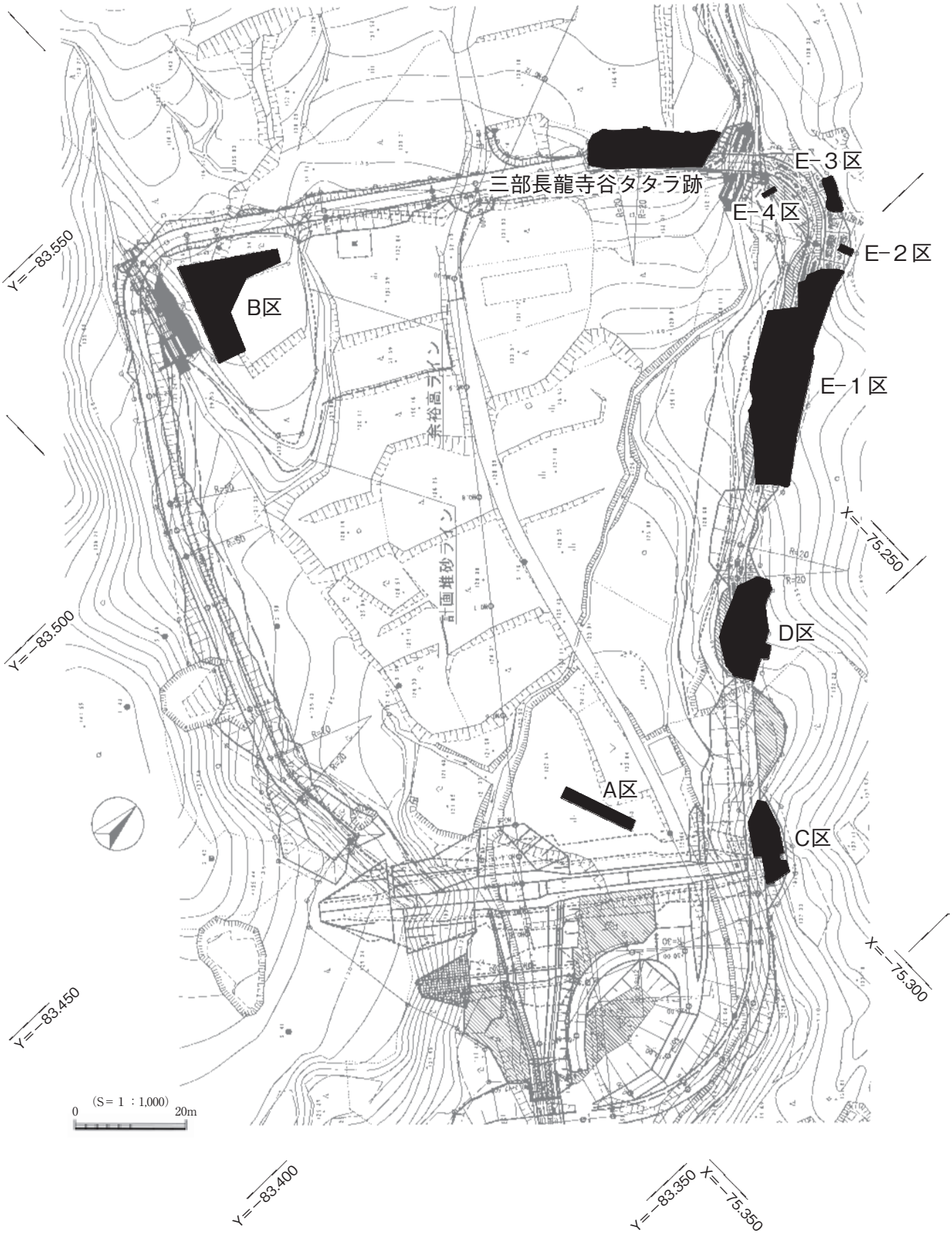
発掘調査では、重機と人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は一輪車と人力により運搬し、重機により調査区外へ排出した。人力による遺構の掘り下げには、鍬とジョレンを用い、遺構の精査にはガリと移植鏝を使用した。

現場での遺物の取り上げは、遺物取上台帳を作成し、出土地点と層位を記録して管理した。検出した遺構名については、調査段階は仮の略号を用いているが、本報告作成段階で変更している。

検出した遺構、遺物の記録には平板とトータルステーションを用い、座標値を記録した。また、写真撮影は、現地では35㎜判の一眼レフカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてカラーフィルム、デジタルカメラも使用した。遺物撮影は、４×５版と35㎜のカメラを使用し、白黒フィルムとリバーサルフィルムで撮影した。

第２節　調査日誌抄

６月25日　重機による表土掘削
６月26日　Ａ区調査開始
６月27日　Ｂ区調査開始
７月５日　駐車場の造成工事
７月11日　Ｃ区調査開始
７月19日　Ｄ区調査開始
７月20日　ハウス、トイレ搬入
８月７日　Ｅ区調査開始
８月23日　長龍寺谷タタラ跡の調査開始
９月７日　ラジコンヘリによる空中写真撮影
９月12日　測量会社によるＤ・Ｅ区の地形測量
９月28日　ハウス、トイレ搬出、本日にて現地調査完了
10月10日　駐車場の撤去工事完了



第４図　野上城跡・三部長龍寺タタラ跡の調査地点

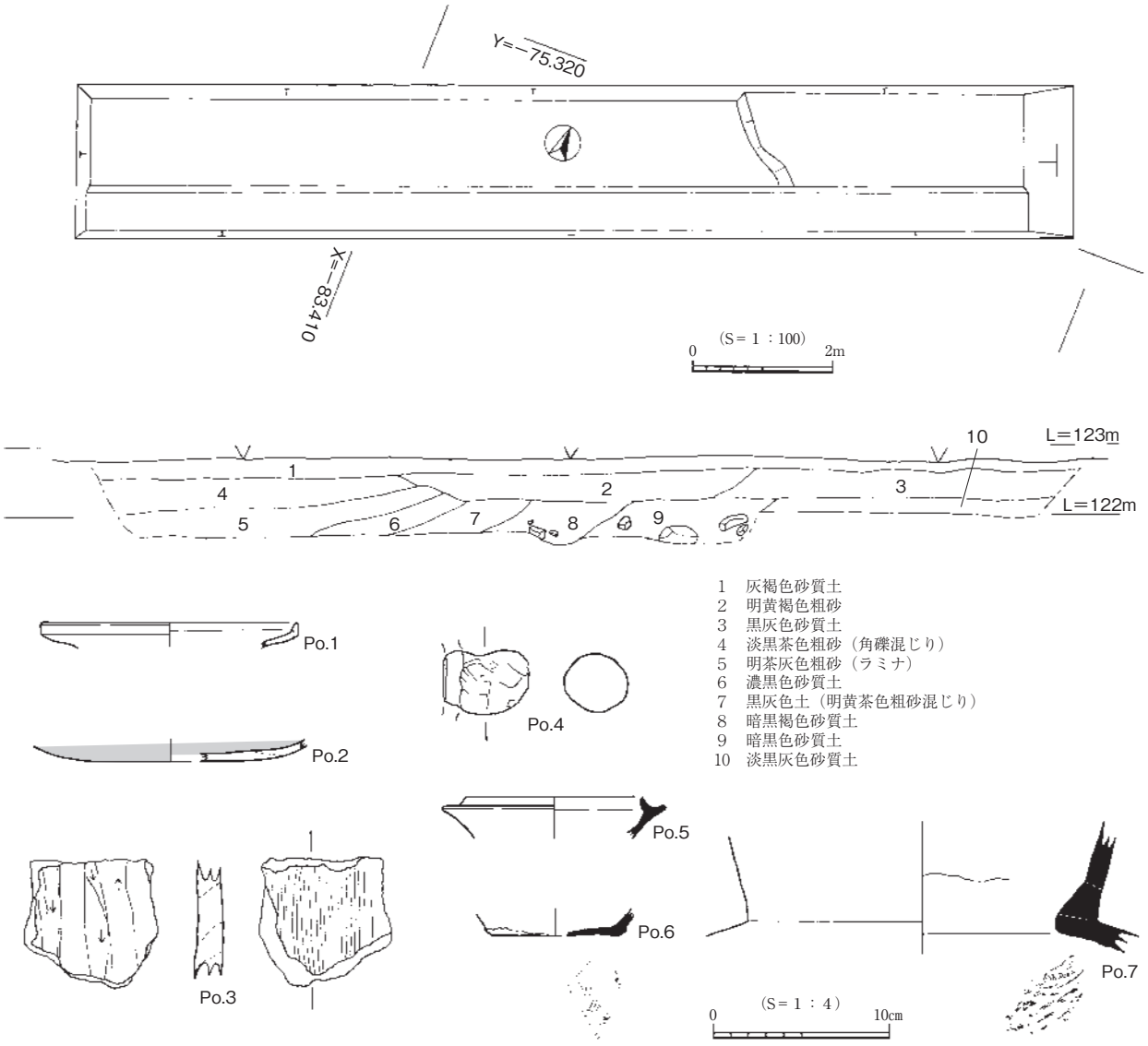
第３節　野上城跡Ａ区の調査（第５図）

排水路の設置工事に伴い設定したＡ区は、砂防ダム予定地のほぼ中央部に位置し、現状は荒地であったが、かつては畑として利用されていたものと考えられた。

調査では、長さ14.5m、幅2.2mのトレンチを設定し、上層から各層位ごとに順次掘り下げ、各面での遺構検出作業を行った。調査深度は、最も深い場所で、表土から1.2mであった。

土層の堆積状況は、トレンチの東側に旧耕作土と考えられる黒灰色砂質土が堆積しているが、西側は粗砂の堆積が卓越し、明瞭なラミナが認められたことや転礫が存在することから、かつての洪水堆積層と考えられた。

この調査区から出土した遺物は、弥生時代中期の甕口縁部片や、古墳時代後期の須恵器坏身片、古代の土師器と須恵器片、移動式カマドの破片であるが、全て遺構に伴うものではなく、上流から流れてきたものと考えられる。

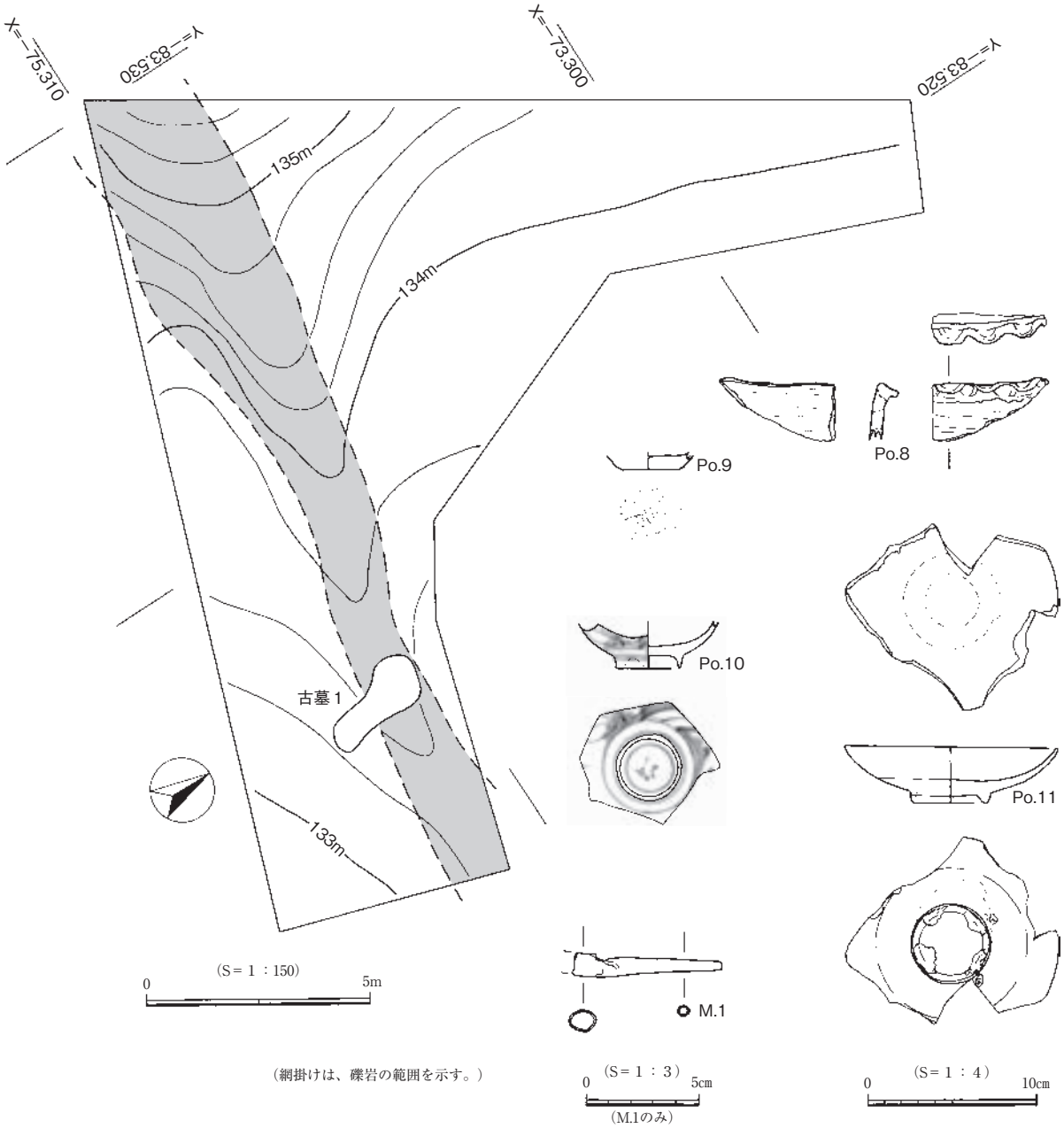


第５図　野上城跡Ａ区　平・断面図・遺物図

第４節　野上城跡Ｂ区の調査（第６・７図）

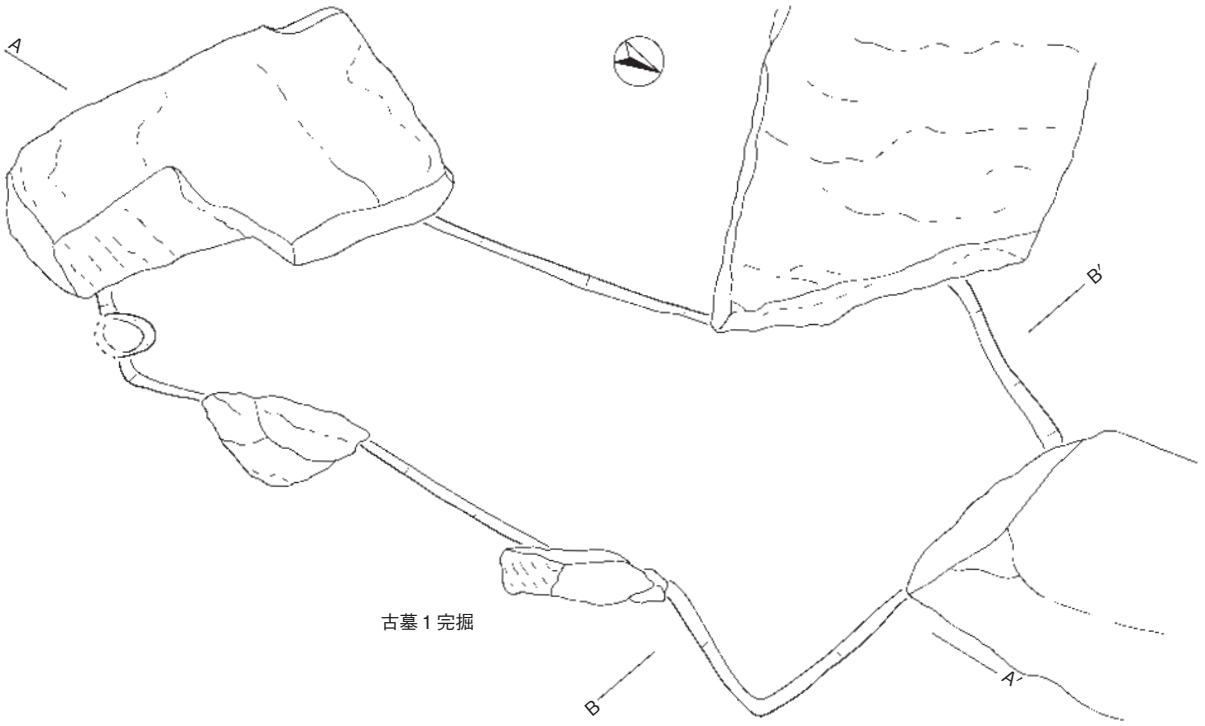
Ｂ区は、ボックスカルバートの設置工事に伴い調査を行った。西側の隣接地では、平成23年度に伯耆町教育委員会による発掘調査が行われており、中世の古墓が検出されている。

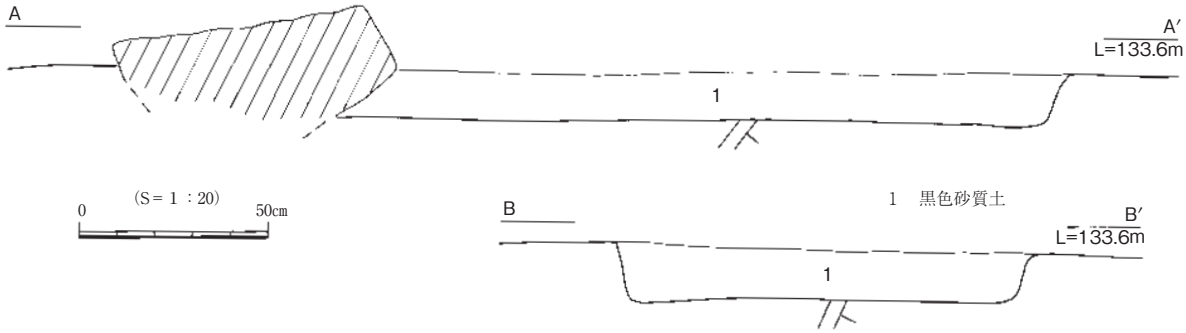
発掘調査の結果、表土から30cmほど堆積する黒色砂質土を除去すると、すぐに明茶灰色の地山となり、北側に平坦地が広がっていることが判明した。恐らく、この平坦地は畑の跡と考えられるが、そのすぐ南側には、調査区を東西方向に貫く巨大な礫岩が列状に散在しており、自然礫の岩脈に沿って耕作時に邪魔になる礫が集められたような状況であった。



第６図　野上城跡Ｂ区　平面図・遺物図

古墓１上面の礫





第７図　古墓１　平・断面図

古墓１　礫岩の検出作業中に、土坑状の輪郭が見えたため検出作業を行ったところ、地山の面で、長さ2.2m、幅1.1m、深さ15㎝のやや不整形な土坑を確認した。形態的な特徴と、隣接地で古墓が見つかっていることから、埋葬施設の可能性が高いものと推測した。埋土は、黒色砂質土のみで、埋土中には拳大から人頭大の礫が含まれていたが、木棺の痕跡は認められない。外見的には２基の土坑が切り合っているように見えるが、断面観察で切り合いを見つけることが出来なかったことと、底面のレベルがほぼ等しいことから、一つの遺構として報告する。

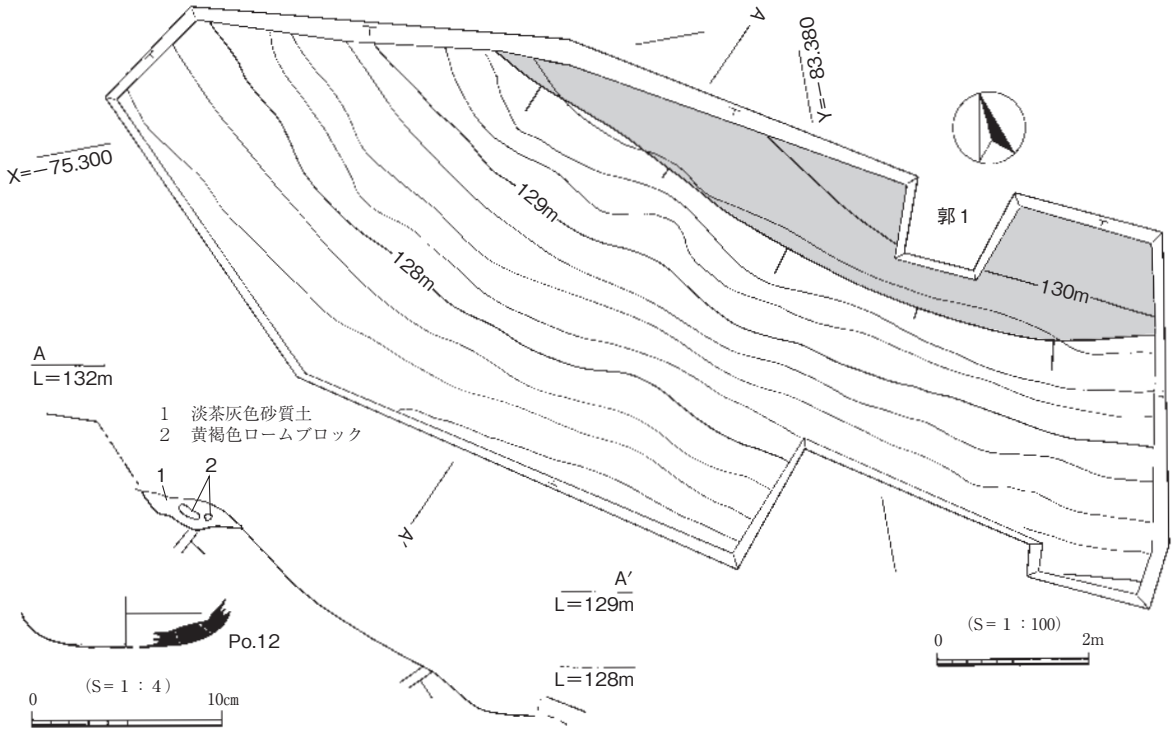
この遺構の年代については、埋土中からの遺物の出土が無かったため、時期を特定することが困難であるが、隣接地でも中世墓が確認されていることから、同様の時期に作られた可能性が高いと考えられる。

このＢ区から出土した遺物は、全て表土中から出土したものであり、遺構に伴うものは無かった。遺物の出土量は少なく、縄紋時代晩期の深鉢、底部を糸切りする土師器の坏身、伊万里焼の碗、肥前系の銅緑釉皿、キセルの吸口が出土したのみである。

第５節　野上城跡Ｃ区の調査（第８図）

Ｃ区は、標高128～131m程の丘陵斜面に位置しており、調査前の現地観察では、工事範囲の北側に小規模な平坦面が存在することが予想された。調査地が急傾斜地にあり、重機が使用できなかったため、全て人力により調査を行った。

Ｃ区の堆積状況は、茶褐色砂質土の表土を除去すると、すぐに黄褐色砂質土の地山となるが、郭１の範囲では、平坦面の下層に所々に黄褐色のロームブロックを含む淡茶灰色の砂質土が水平堆積しており、郭を造成する際に敷かれた盛土と考えられた。



第８図　野上城跡Ｃ区　平・断面図・遺物図

郭１　標高130mの地点で検出した平坦地は、長さ10m、幅1.5m程の狭い範囲であるが、北西部の調査区外にもこの平坦地は伸びており、復元すると、長さ20m、幅５m程の小規模な郭であったと考えられる。検出した範囲では、ピットや集石などの明確な遺構は確認できなかった。

この平坦地が造成された時期については、表土掘削中に出土した遺物が須恵器の坏身片１点のみであるため不明であるが、野上城跡の範囲にあることから、野上城が築城された際に、合わせて造られた郭として理解しておく。

第６節　野上城跡Ｄ区の調査（第９～11図）

Ｄ区は、南側に向けて尾根状に伸びる、標高130～133mの丘陵上に位置しており、調査前の観察では、標高131m付近において、東西方向に広がるなだらかな平坦地形が確認された。

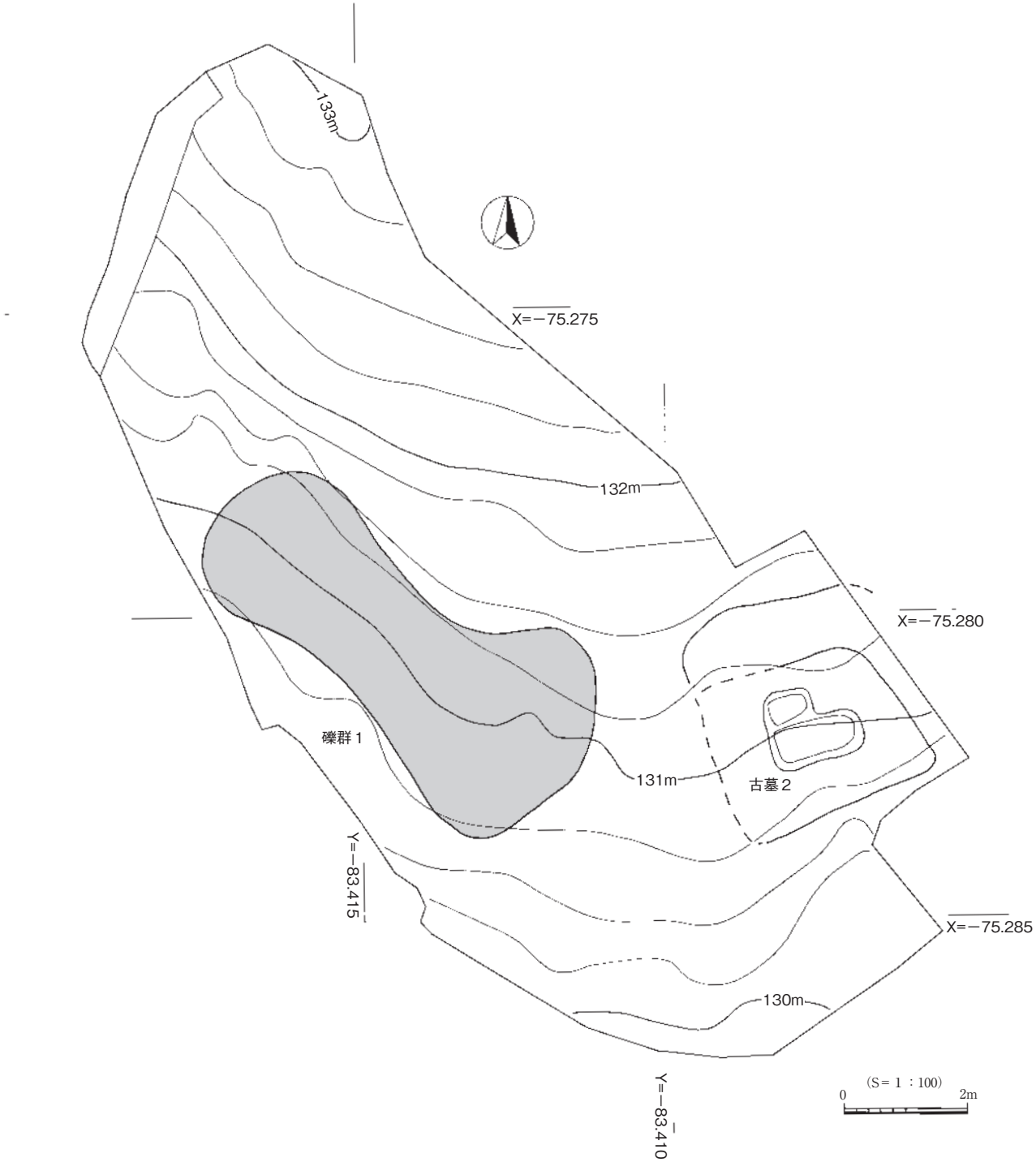
土層の堆積状況は、調査区の頂部付近では表土直下10㎝程度ですぐに地山となるが、斜面下部では30～50㎝程度の表土に覆われている。調査の結果、礫の散布と石組による周溝を備えた古墓を確認した。

礫群１　調査地の南西側において、長さ10m、幅３m程度の範囲に、やや平坦な地形があり、その周囲に拳大の礫が80個ほど点在していた。検出した状況からみて、郭の防御用に集められた礫石と考えられたが、地山の中に含まれている礫と同じ様な角礫があることから、自然礫も相当数含まれていると考えられる。ただし、野上城跡の範囲内にあることから、攻撃用に備えられた礫石の可能性も残る。

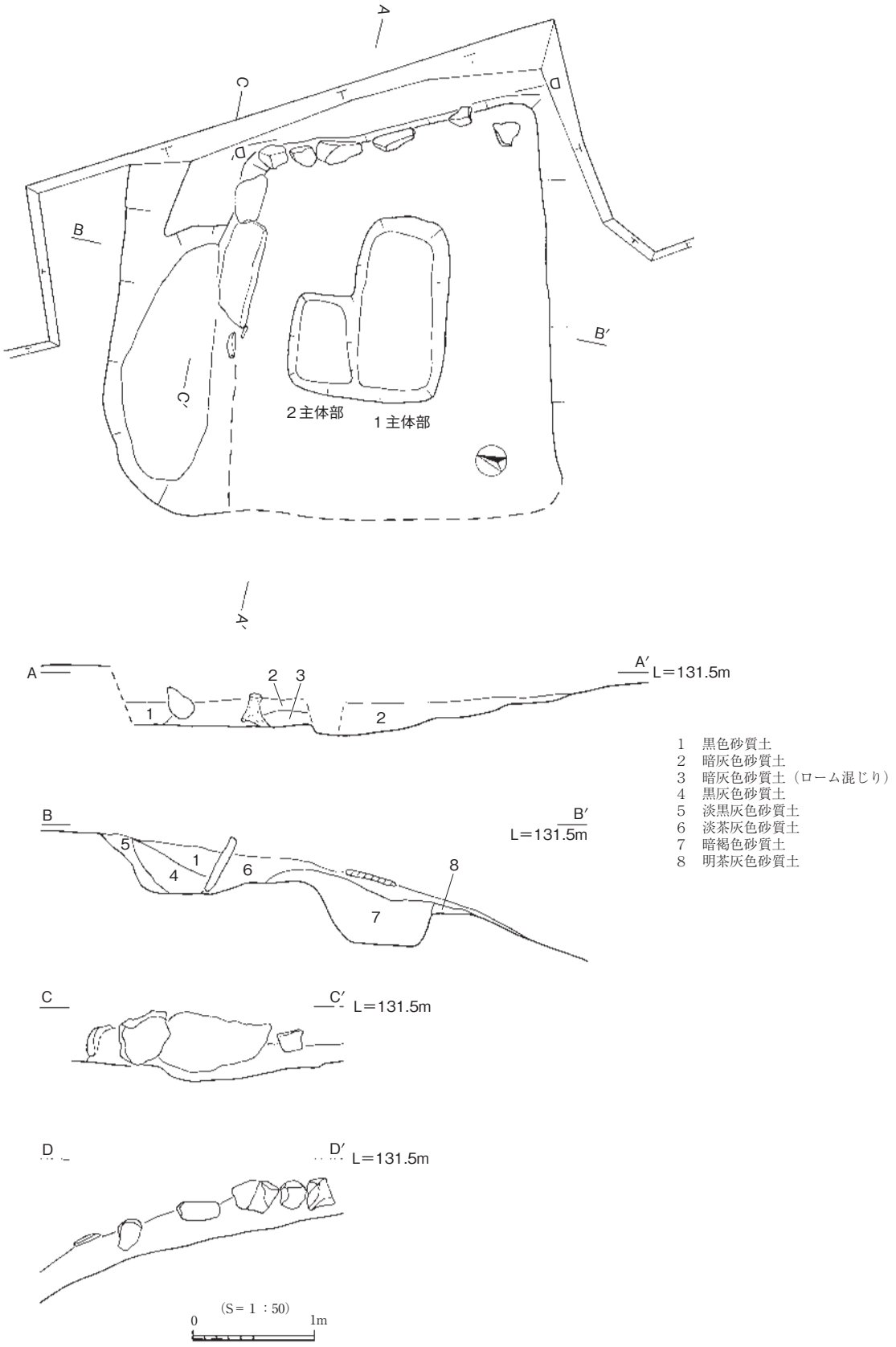
古墓２　調査地の東側に平石が露出していたことから、組み合わせ式石棺状の遺構があるものとして、調査範囲を拡張した結果、周溝を持つ古墓であることが確認された。墳丘の規模は、長辺3.5m、短辺2.5mの台形を呈し、周溝の深さは最大で40㎝程度である。北側の周溝は、長さ80㎝、幅50㎝の板石を用いて盛土が流出しないよう抑えられていた。東側の周溝は、人頭大の石を使用しているが、南側には石は使われておらず、周溝の立ち上がりも確認できなかった。また、西側については周溝の痕跡が認められず、当初から周溝は存在しなかったものと考えられた。

主体部は２基存在し、どちらも東西方向に主軸を向け、１主体部の上に板石を置いていた。どちらも木棺の痕跡は確認できなかった。この遺構の年代については、周溝内から出土した須恵器（Po.17）から、平安時代以降に造られ、16世紀頃に野上城の築城に伴い墳丘が削平されたと考えられる。

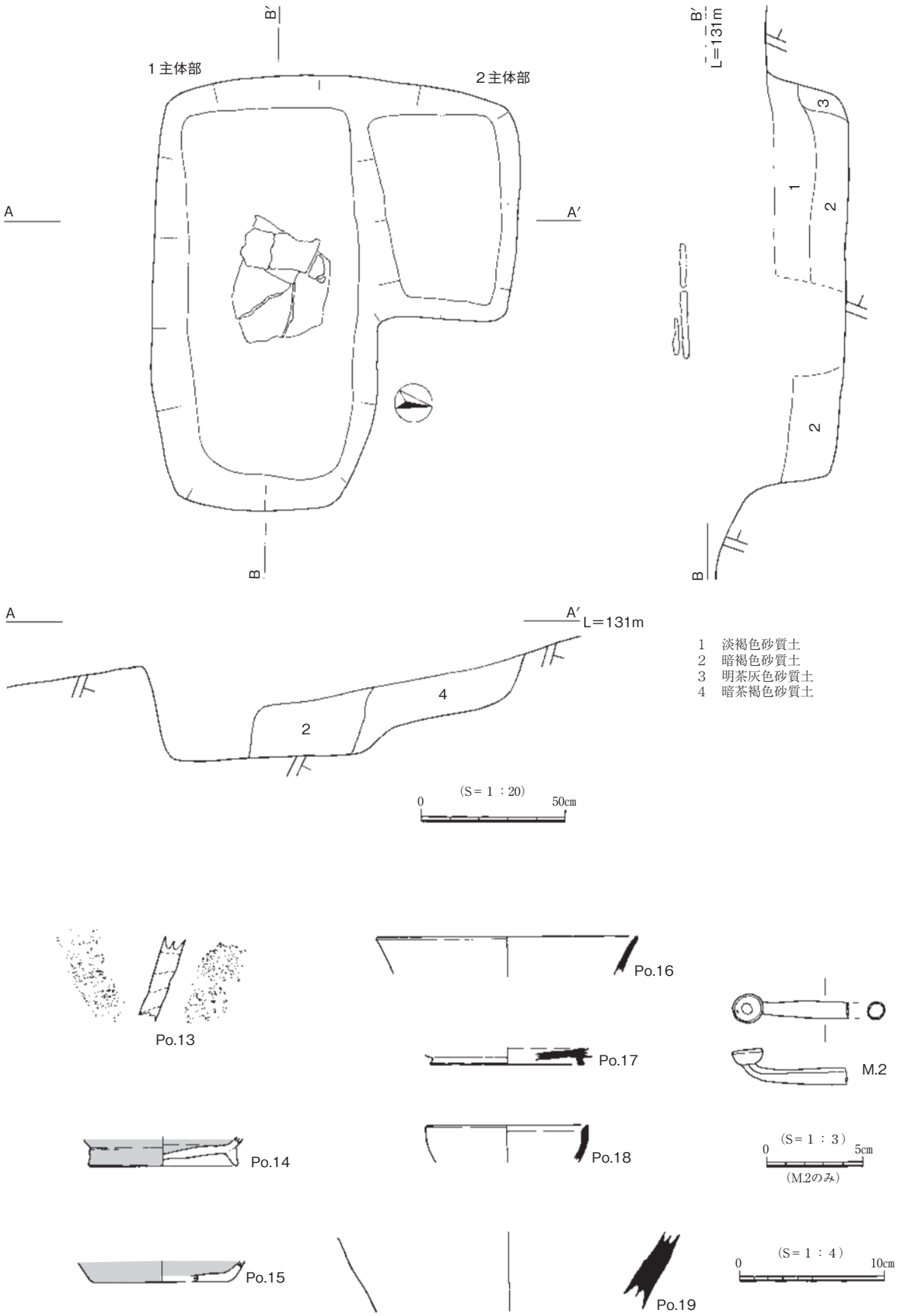
この地区から出土した遺物は、押型紋土器、赤色塗彩された土師器坏身、須恵器の坏身、瓷器系陶器の甕、煙管の雁首が出土した。



第９図　野上城跡Ｄ区　平面図



第10図　古墓２　平・断面図



第11図　古墓２　主体部　平・断面図・遺物図

第７節　野上城跡Ｅ区の調査（第12～22図）

Ｅ区は、野上城の主郭の北側を区画する堀切部の堀底から西側に下った、標高132～139m程度の斜面地に位置する。現状では南側に平坦地が広がり、北側はやや急峻な斜面となっている。また、E-３区の北東部は、戦後に行われた土取りにより地形の一部が大幅に改変されている。

発掘調査は、１区の南側平坦地は全面調査を行ったが、北側の斜面部については、排土置場の関係から３カ所のトレンチを設定して対応した。ここから検出した遺構は、１区の丘陵斜面部で古墓を１基と、南側の平坦地で３つの郭群を調査したほか、郭の造成盛土を除去した地山面から土坑を１基検出した。また、E-３区では礫群２を確認したが、それ以外の調査区では遺構は確認されなかった。

堆積状況　土層の堆積状況は、トレンチ調査を行った地点では、いずれも10～30cm程度の表土が覆っているに過ぎず、すぐに地山となる。１区では、北側の斜面で古墓が検出されたが、それ以外には遺構は見られず、表土も数cm程度と、薄く堆積しているに過ぎなかった。

南側の平坦地では、表土下に褐色の砂質土が厚く堆積しており、一見すると地山のようでもあったが、下層からも遺物が出土することから、郭群を造成した際の盛土と判断した。

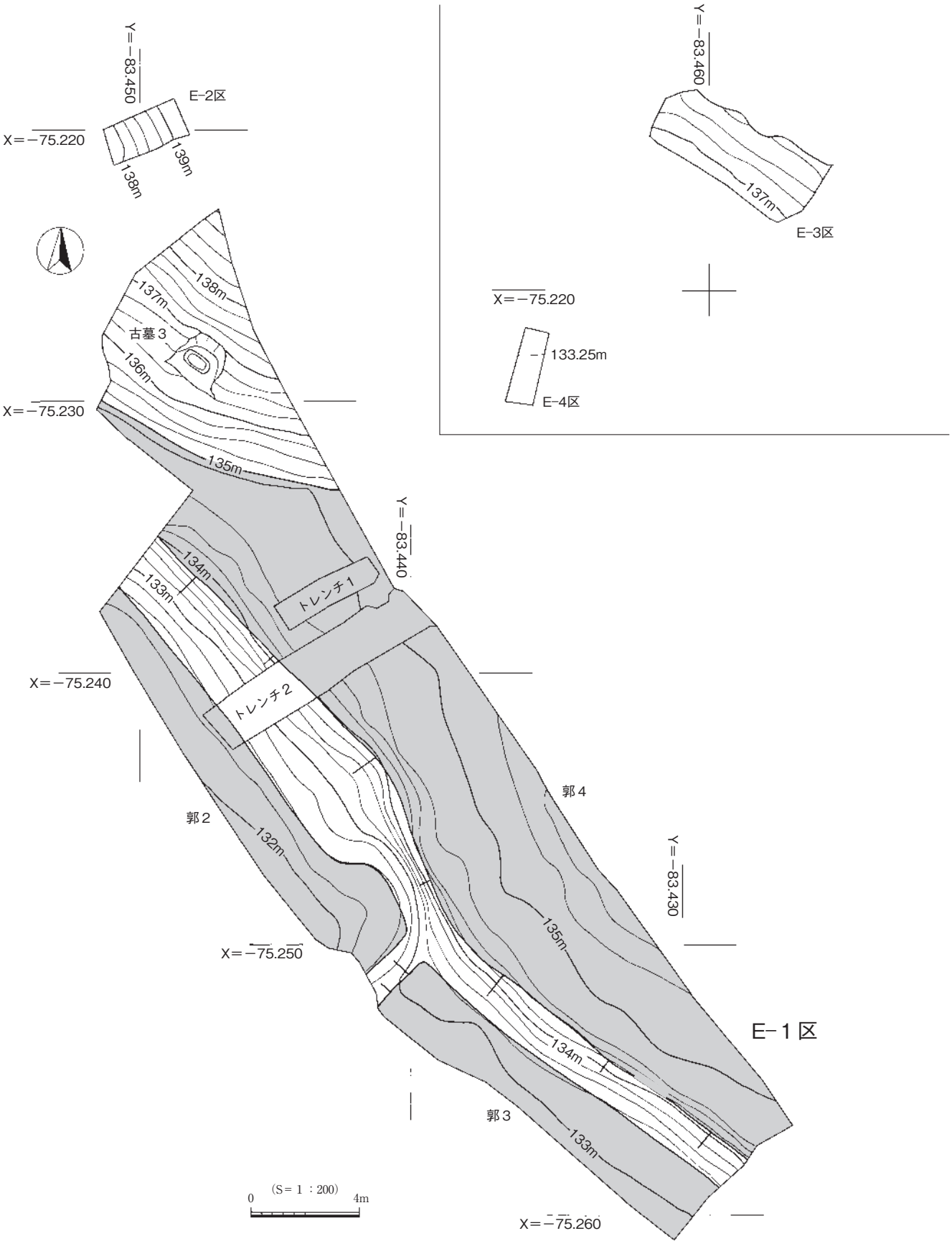
郭２～４　１区の南側には段状に広がる帯郭状の平坦地が３カ所あり、調査区外の下にも段状の平地が広がっている。郭４から北東に進むと、野上城の主郭の北側に位置する堀切の底に至ることから、主郭への接近を防ぐための防御施設として機能したものと考えられた。

標高132mの地点にある郭２は、検出した長さ17m、幅3.3mあり、郭３との隣接地がやや広くなっている。郭３は、検出した長さ14m、幅2.5mを測る。調査区外の様子が分からないが、恐らく長方形の区画を意識して造成したものと推測される。隣接する郭２との段差は、およそ１mである。郭４は、検出した長さ37m、幅６mであるが、調査区外にもさらに広がっているものと考えられる。郭３との段差は、およそ1.5mである。これらの郭群は、いずれも土塁や柵などの痕跡を残さず、遺構面には明確な遺構が存在しない。また、郭２と郭３の南側には水路があるため、段差の部分がオーバーハングするようにして削られている状況であったが、本来はもう少し大きな郭であった可能性が高いものと推測される。

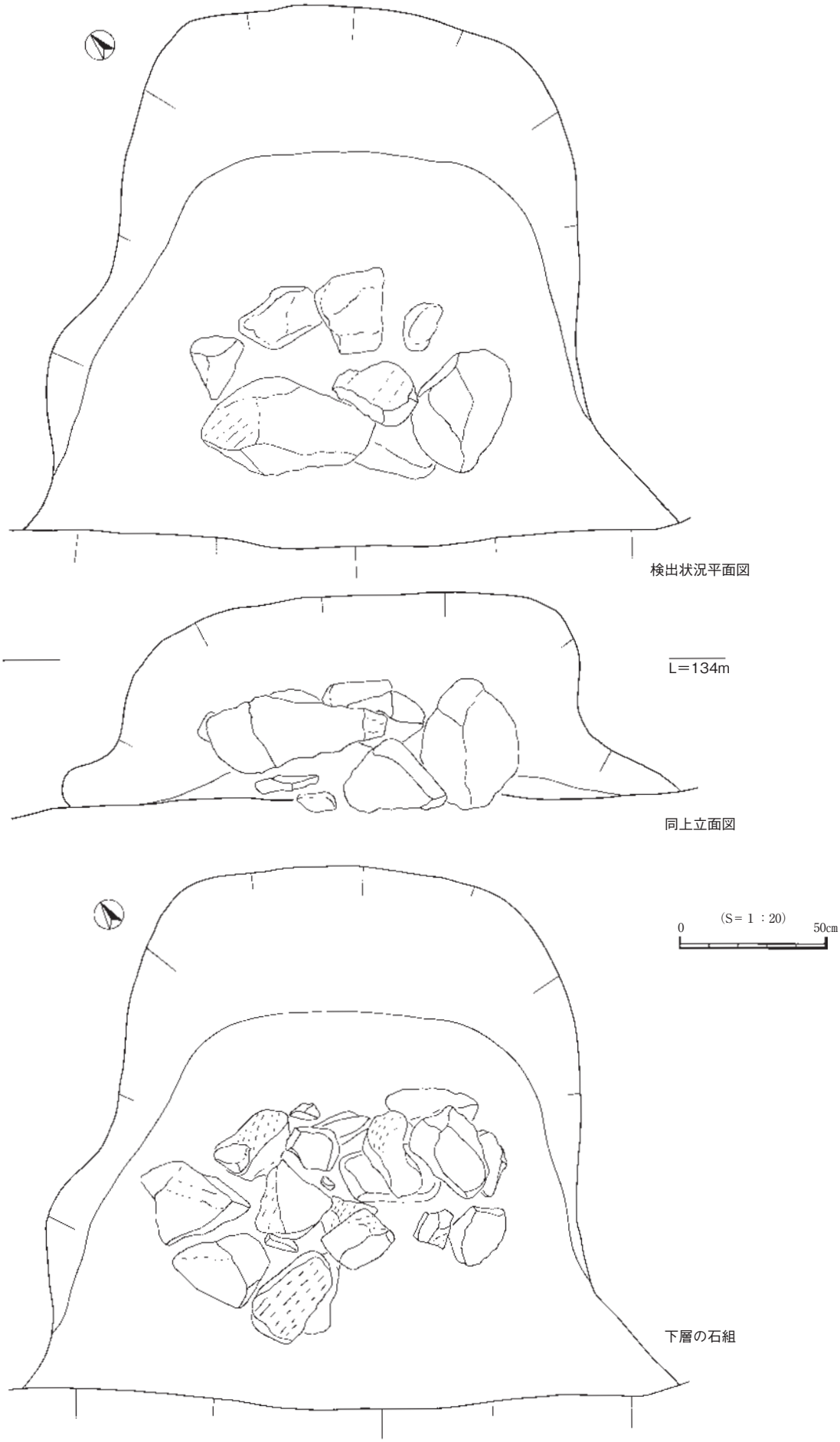
古墓３　古墓３は、郭群の北に位置する斜面部の標高136mの地点にあり、調査前から一部の石組が露出していた。石組は角礫を主体としており、大きなものでも一抱えほどもあるものが使用されている。また、五輪塔や宝篋印塔の部材などは含まれていなかった。

石組の積み上げ方法は、斜面を幅２m、奥行1.4mの範囲でテラス状にカットして平坦地を造成し、中央に埋葬部と見られる長辺95cm、短片60cm、深さ40cmの長方形の土坑を掘って、更に上面に石を積み上げたものであり、調査では３回に分けて石を取り外した。

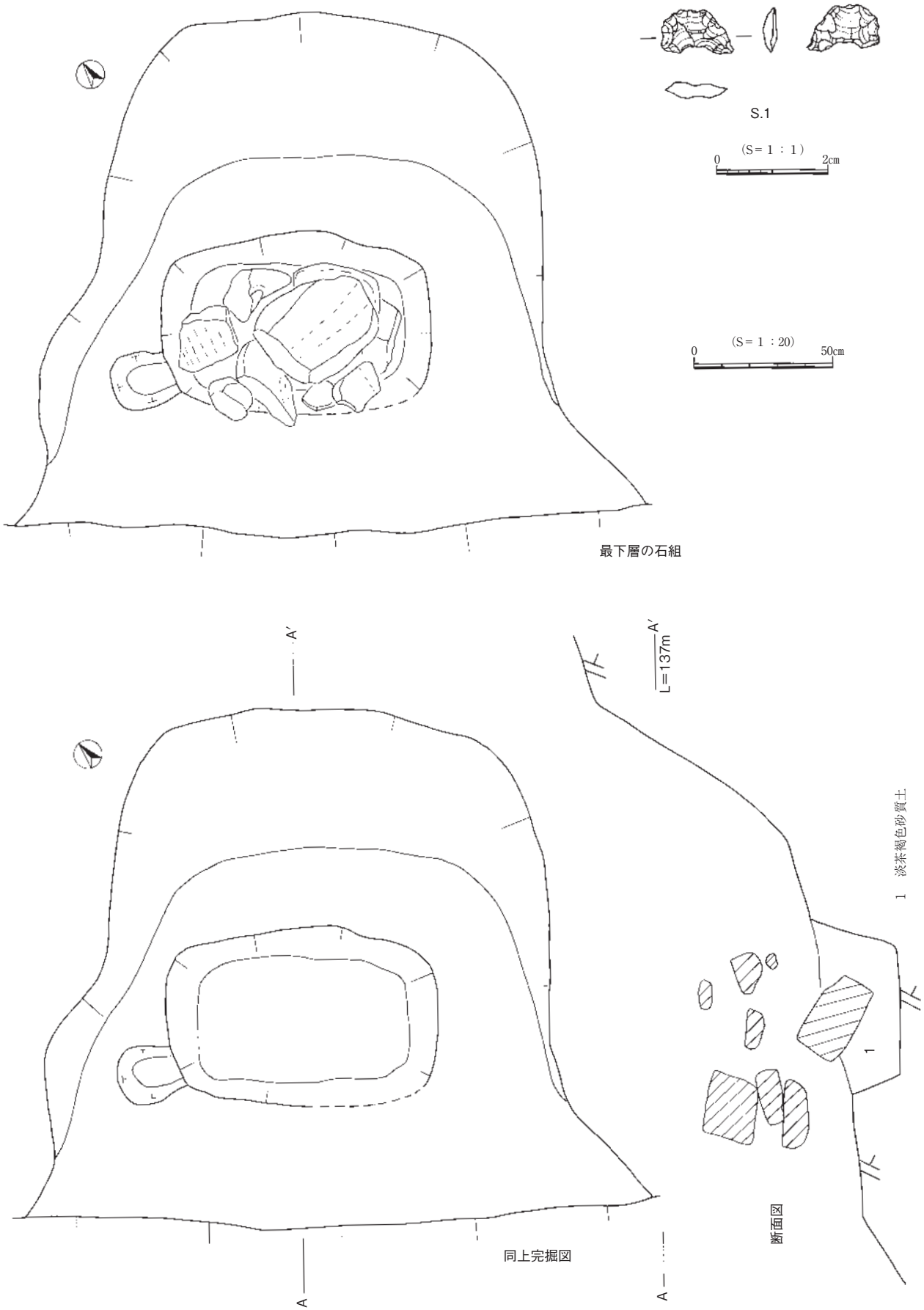
この遺構に伴う遺物については、掘り下げ中に先端部を破損した黒曜石製の石鏃が１点出土したのみであり、そのほかの遺物は全く出土しなかった。



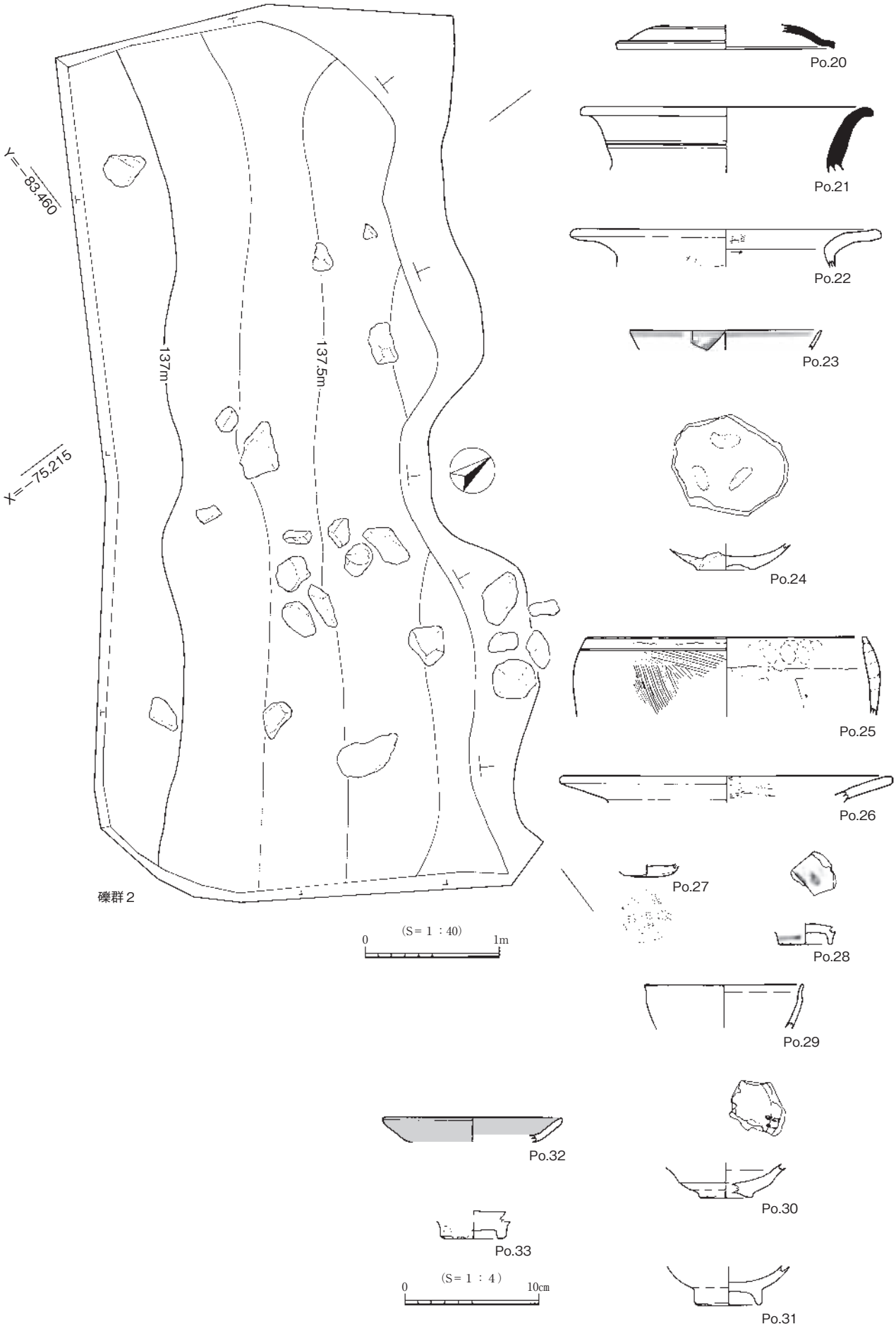
第12図　野上城跡Ｅ区　平面図（第１遺構面）



第13図　古墓３　平・立面図



第14図　古墓３　平・断面図・遺物図



第15図　野上城跡E−３区　平面図・包含層出土遺物図

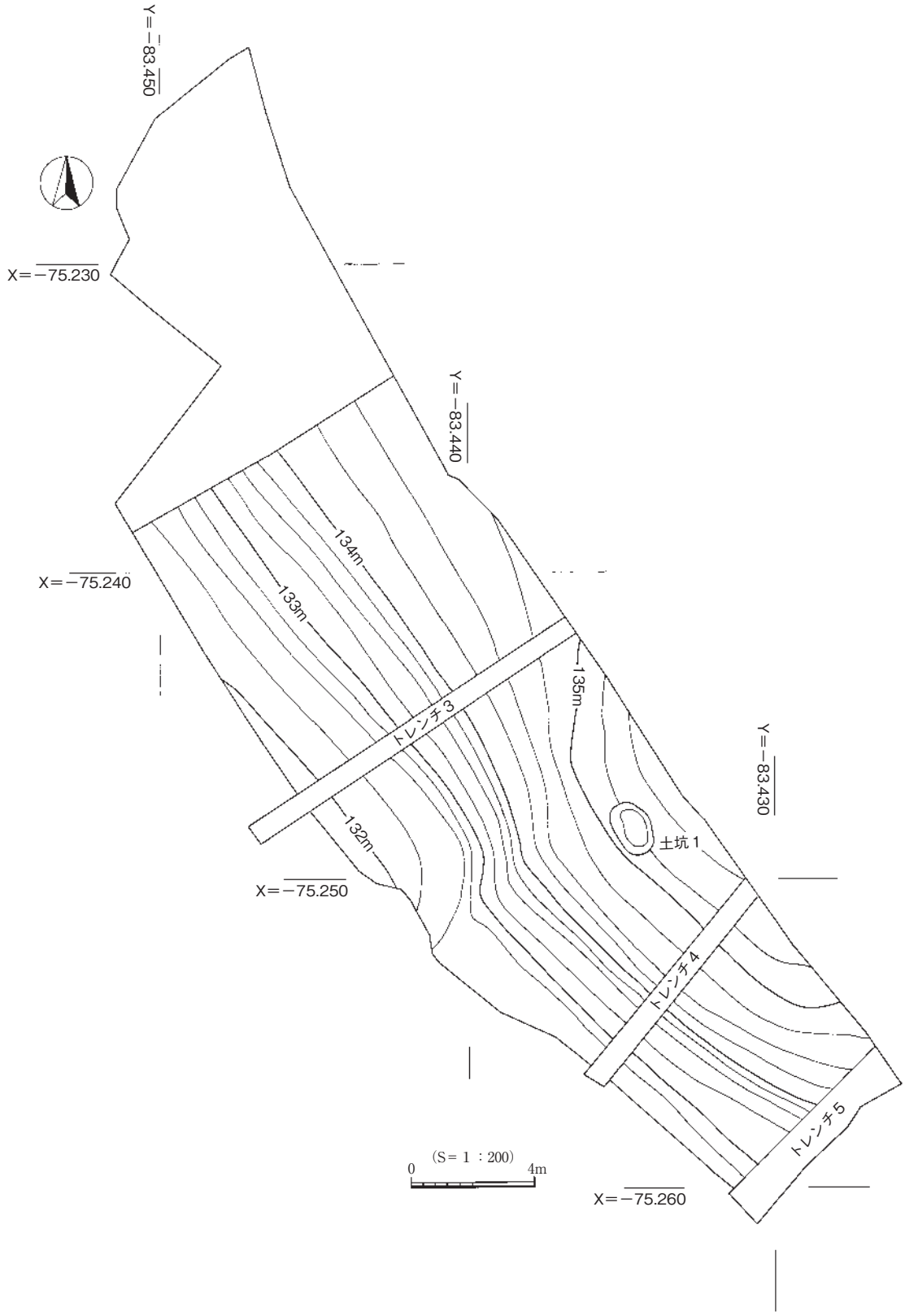
礫群２　E−３区の全面に広がる人頭大から拳大の礫が散布している遺構で、性格は不明である。

トレンチの北側は、戦後の土取りにより大きく削られており、ここにも礫が点在していた。石の散布状況に規則性が認められないことから、石組の古墓を解体した痕跡とも考えられたが、埋葬部が存在しないため断定できない。このE−３区からは、表土掘削中にPo. 25〜31の遺物が出土したが、この礫群に伴うものかどうかは断定できなかった。

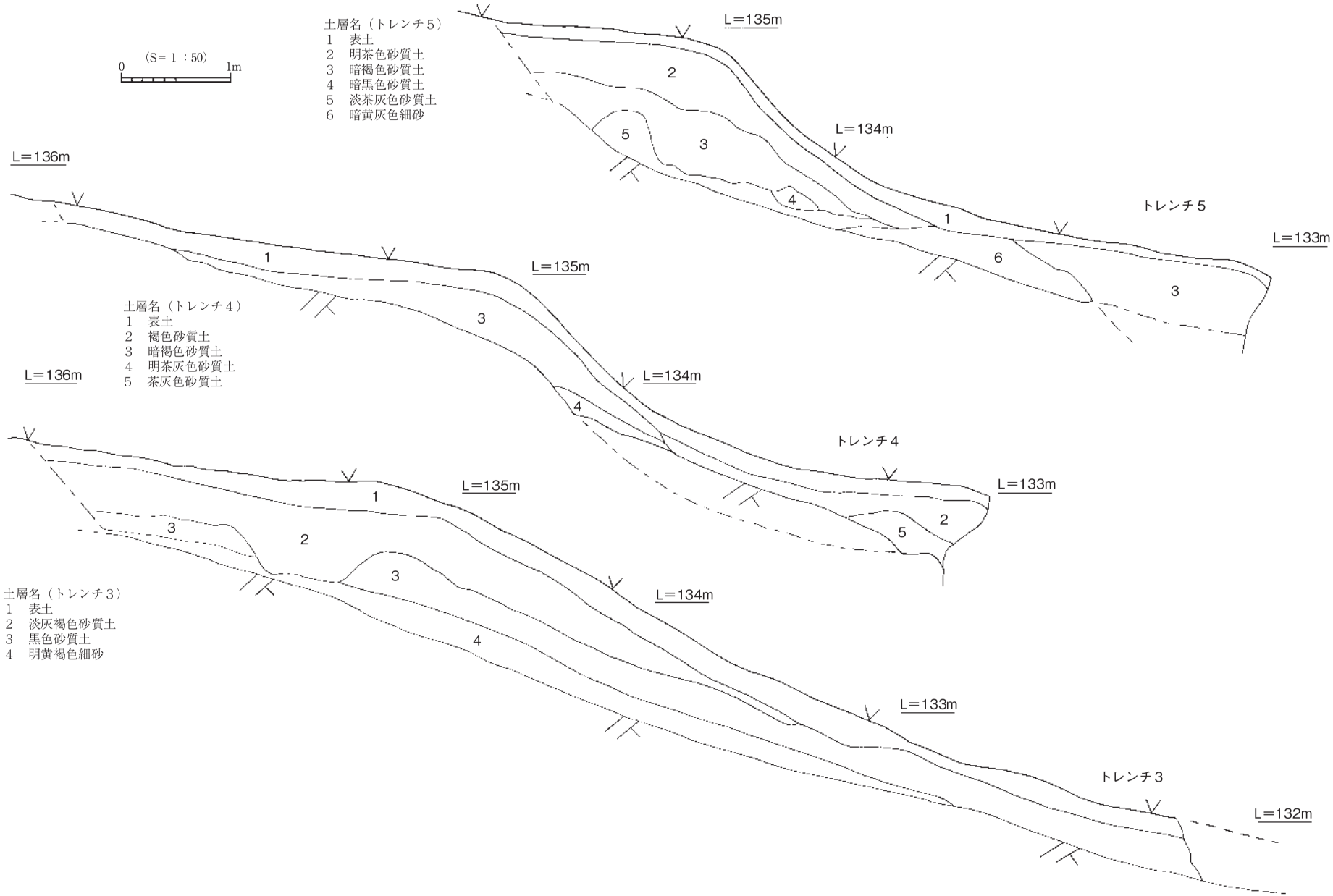
包含層出土遺物　Ｅ区の包含層から出土した遺物は、年代的には古代から近世にかけてのものが主体であり、これらは概ね表土の掘削中に出土したものである。Po. 20は、須恵器の坏蓋である。Po. 21は、頸部に沈線が廻る須恵器の甕口縁部片。Po. 22は、口縁部が水平方向に伸びる土師器の甕口縁部片。Po. 23は、青花の碗である。Po. 24は、淡赤褐色を呈する砂目積の唐津皿である。Po. 25は、外面をハケ、内面をケズリ調整する土師器の鉢である。Po. 26は、口縁部が大きく開く甕。Po. 27は、底部を糸切する土師器皿。Po. 28は、饅頭心の青花碗底部。Po. 29は、瀬戸・美濃系の天目茶碗口縁部。Po. 30は、鉄絵唐津の皿である。Po. 31は、呉器手碗。Po. 32は、内外面とも赤色塗彩する土師器坏身。Po. 33は、青磁碗の底部である。

郭下層出土遺物　郭の造成土の調査については、３カ所のトレンチを設定し、土層観察を行った。その結果、郭の造成土は、地山の花崗岩の風化土とあまり変化のないものを用いていることから、恐らく、主郭北側の堀切を造る際に生じた残土を利用して郭を造成しているものと考えられた。

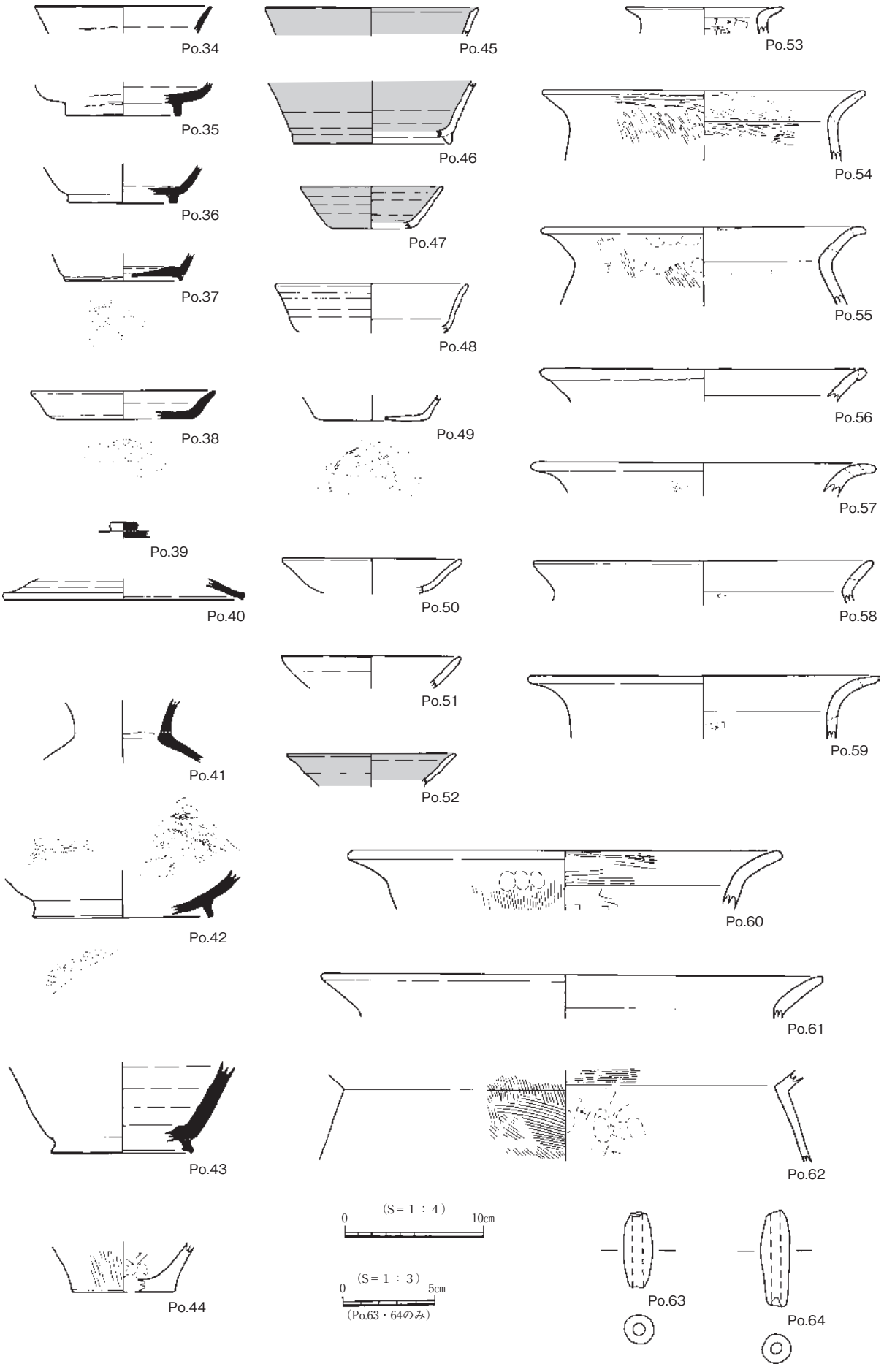
郭の造成盛土中から出土した遺物は、弥生時代から近世前半期までのものが見られるが、特に古代の遺物が多く含まれており、当該期の遺構を壊して郭を造成した状況が窺える。Po. 34は、須恵器の坏身口縁部。Po. 35からPo. 37は須恵器の坏身底部で、Po. 37は口縁部への立ち上がり付近に高台が付く。Po. 38は、高台の付かない須恵器皿。Po. 39は、やや扁平な宝珠形を呈する坏蓋のつまみ部。Po. 40は、須恵器の坏蓋。Po. 41は、須恵器提瓶の頸部。Po. 42は、外面にタタキ目、内面に当て具痕を残す高台を持つ須恵器で、無頸壺の底部か。Po. 43は、高台を持つ須恵器長頸壺の底部で、焼成はやや瓦質に近い。Po. 44は弥生土器の底部で、外面にミガキを施す。恐らく、弥生時代中期頃のものと考えられる。Po. 45は、口縁端部が突出する土師器の坏身。Po. 46は、やや退化した高台を持つ坏身で、高台内以外は赤色塗彩される。Po. 47は高台を持たない坏身で、内外面とも赤色塗彩する。Po. 50とPo. 51は、手捏ね整形される土師器皿で、いわゆる京都系土師器皿である。Po. 53〜62は甕形の製品で、Po. 53は褐色を呈し、胎土には細かい砂粒を多く含む。弥生時代まで遡るものか。Po. 54〜59は、口径が25㎝未満のもので、古墳時代から古代にかけてのものと推測される。Po. 60〜63は、口径が30㎝を超える大型品で、鍋とするにはやや小さいが、中世まで下るものか。Po. 63・64は、手捏ね整形された土錘である。Po. 65とPo. 66は、口縁端部を屈曲させる白磁の皿で、Po. 66はやや薄手である。Po. 67は、外面にやや退化した蓮弁紋を描く青磁の碗である。Po. 68は、伊万里焼の碗。Po. 69は、瀬戸・美濃系の天目茶碗の口縁部である。Po. 70は、蓮弁紋を模した瀬戸焼の碗である。Po. 71は、胎土目積の唐津焼皿。Po. 72とPo. 73は、肥前産と思われる陶器碗である。Po. 74は口縁部が上方に大きく立ち上がる備前焼の擂鉢。S. 2は、凝灰岩製の小型砥石で、一部を欠損しているが５面に擦痕がある。M. 3は、長さ16. 2㎝の棒状鉄製品だが、錆化が著しいため原形は不明である。



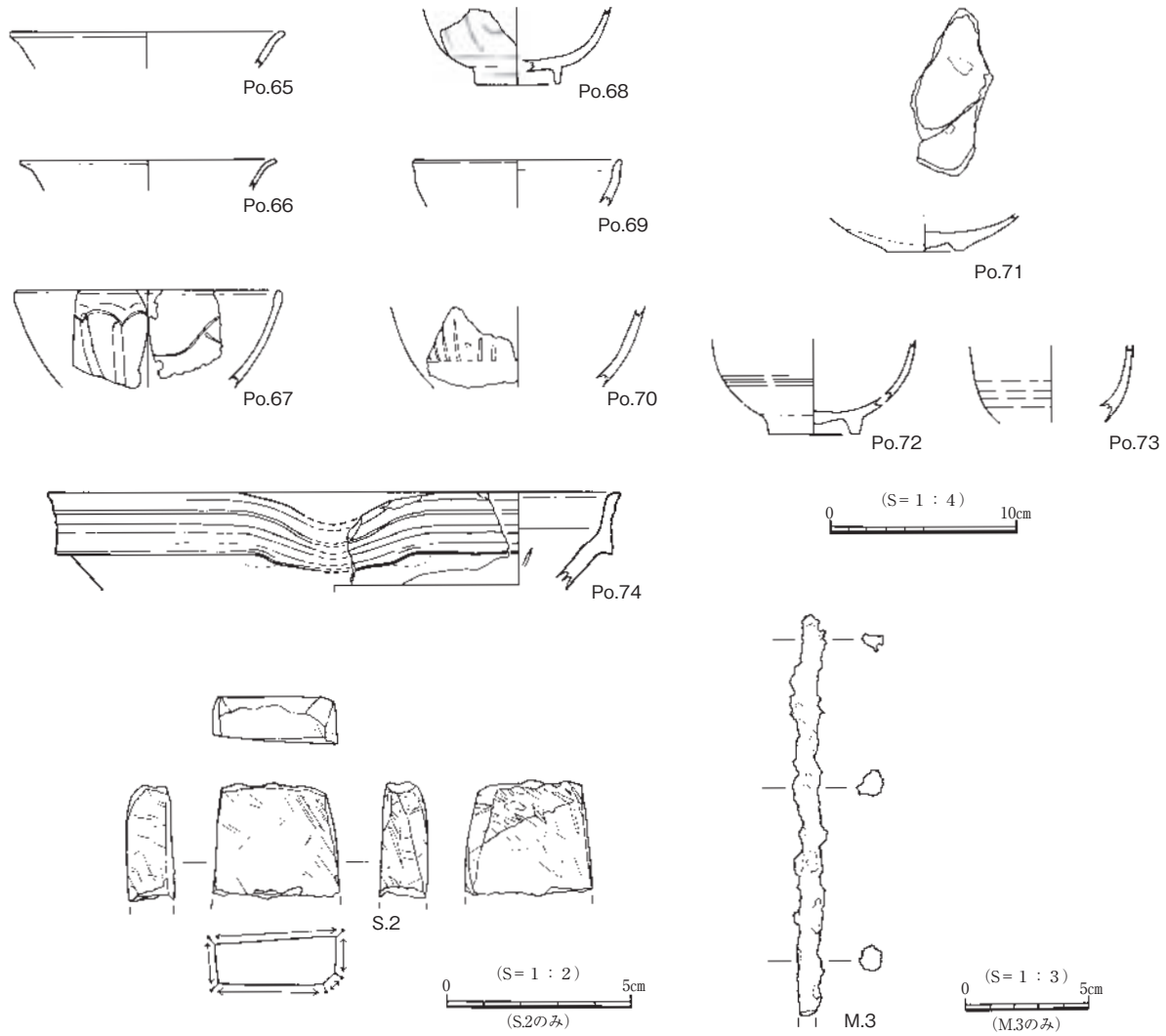
第16図　野上城跡E−１区　平面図（第２遺構面）



第17図　野上城跡Ｅ区　トレンチ断面図（第２遺構面）



第18図　野上城跡Ｅ区　郭下層出土遺物図①



第19図　野上城跡Ｅ区　郭下層出土遺物図②

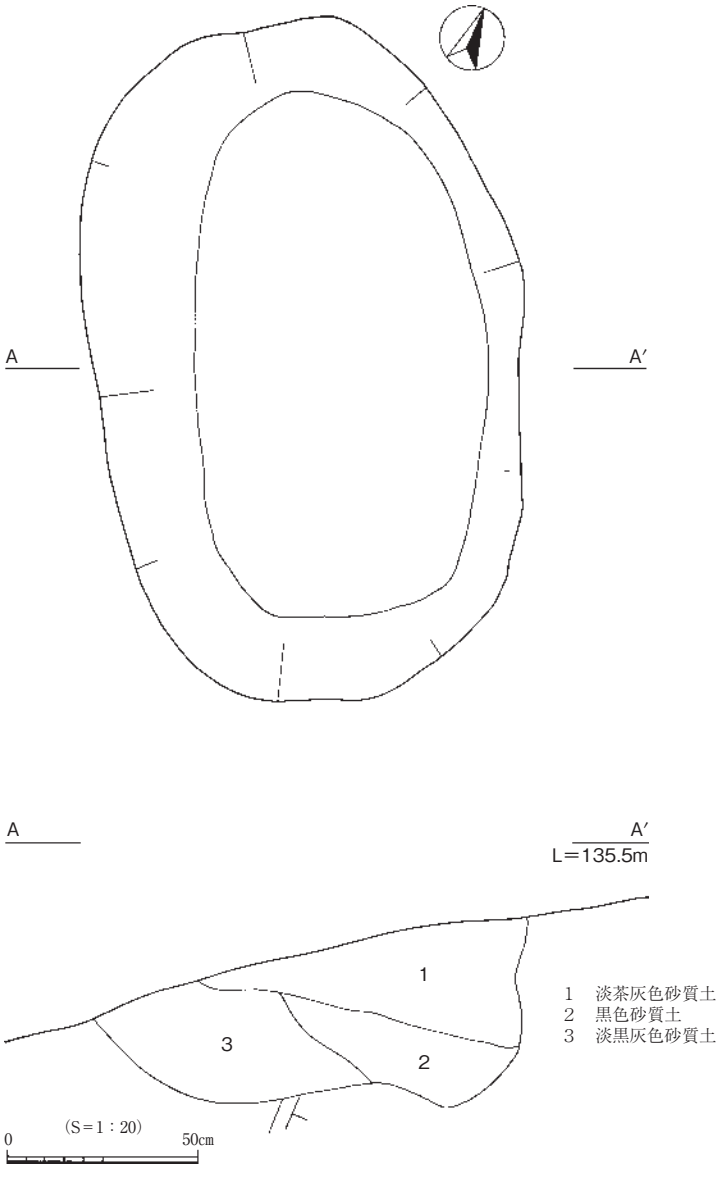
土坑１　土坑１は、郭４の盛土を除去した地山面で検出した。長径1.8m、短径1.2m、深さ50cmの楕円形を呈する土坑である。内部は黒色の砂質土が堆積しており、埋土には細かい炭化材を多く含んでいる。ここからは、土師器と須恵器、鉄製品、炭化した木材が出土した。

Po.75は、土師器の坏身口縁部で、内外面とも赤色塗彩されている。Po.76～Po.80は、口縁端部の返りがやや退化した須恵器の坏蓋である。Po.76はリング状のつまみを持つもので、Po.80が扁平な宝珠状のつまみを持つ。焼成はいずれも不良で、一見すると土師器と区別がつかないものもある。Po.81は、復元口径15.8cmの須恵器坏身で、Po.82は高台の付く須恵器坏身である。Po.83は、高台を持たない須恵器の皿で、復元口径13.1cmを測る。Po.84は、高坏の脚部片として図化したが、瑠か長頸壺の口縁部片の可能性も考えられる。Po.85は、外面をタテハケ調整する土師器の甕で、表面にはススが付着しており、実際の煮炊きに使用されたものと考えられる。Po.86は、器高5.8cmの小型の壺。底部は糸切で、表面は被熱によって荒れている。Po.87はPo.88と同一個体と見られる長頸壺の口縁部片。Po.88は高台を持つ須恵器の長頸壺。Po.89は、口径14.5cmの広口壺で、底部には焼台が付着している。Po.90は、頸部が広がる大型甕の口縁部片で、沈線と波状紋を施している。Po.91は、口縁部がすぼまる甕で、頸部にボタン状の浮紋を貼り付ける。Po.92は、口縁端部が段状に肥厚する甕で、口頸部にヘラ描きの線刻が刻まれる。M.4の鉄製品は、鍛造品と見られる板状の製品を棒状の

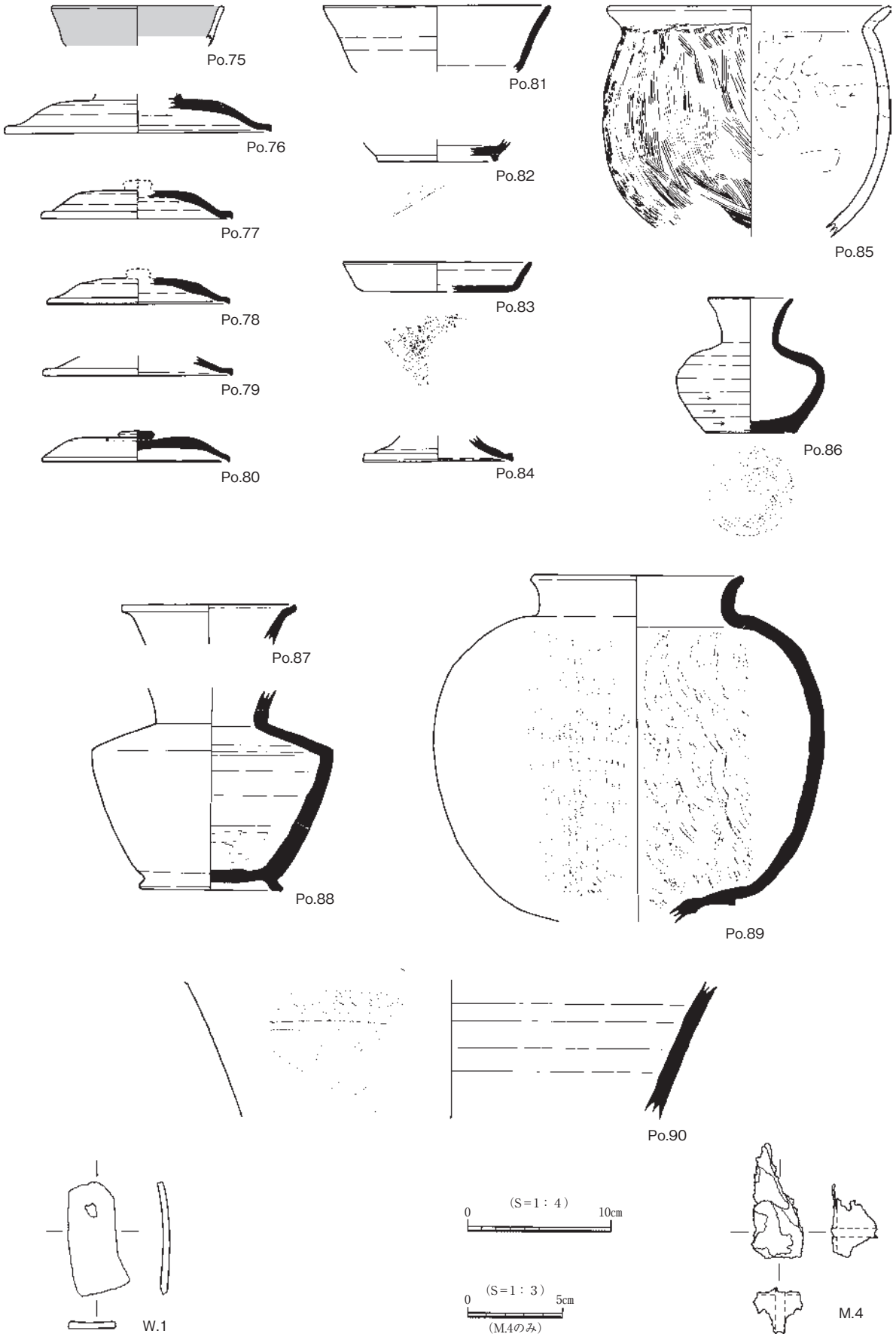
鉄で固定したものであるが、器種は分からない。W.1の炭化材は、ケヤキを用いた板状のもので、緩やかにカーブしながら立ち上がる形状から、皿などの木製容器が燃えて炭化したものと考えられた。

これらの遺物は、どれも被熱した痕跡があるため、火災などの理由で火を受けたものが一括して投棄されたものと考えられる。ただし、地山の岩盤層を掘削して作られていることから、廃棄土坑として掘削されたと考えると、やや大げさな遺構である。周辺での類例を見ると、下山南通遺跡において検出された平安時代の鍛冶関連土坑が見られるが、本遺構からは鉄滓などの鍛冶関連遺物が全く出土していないため、鍛冶に伴う遺構とは考えにくい。米子市の陰田遺跡群においても、丘陵斜面に形成されたテラス状遺構でも、今回のような大型土坑はほとんど見つかっておらず、どのような性格の遺構であったのか推測することは難しい。

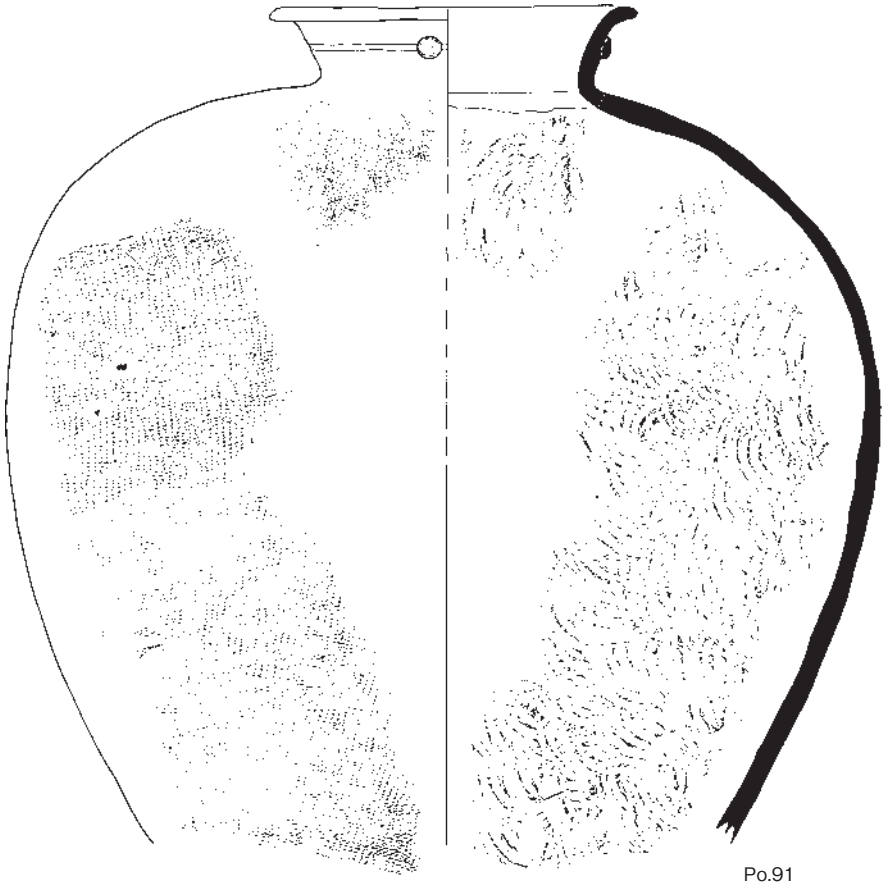
この土坑の年代については、出土した遺物から、奈良時代の後期から平安時代の前期頃のものと考えられが、放射性炭素年代測定の値では、AD660～780年の暦年代が提示されており、遺物の年代観と比較すると、やや古い数値を示している。



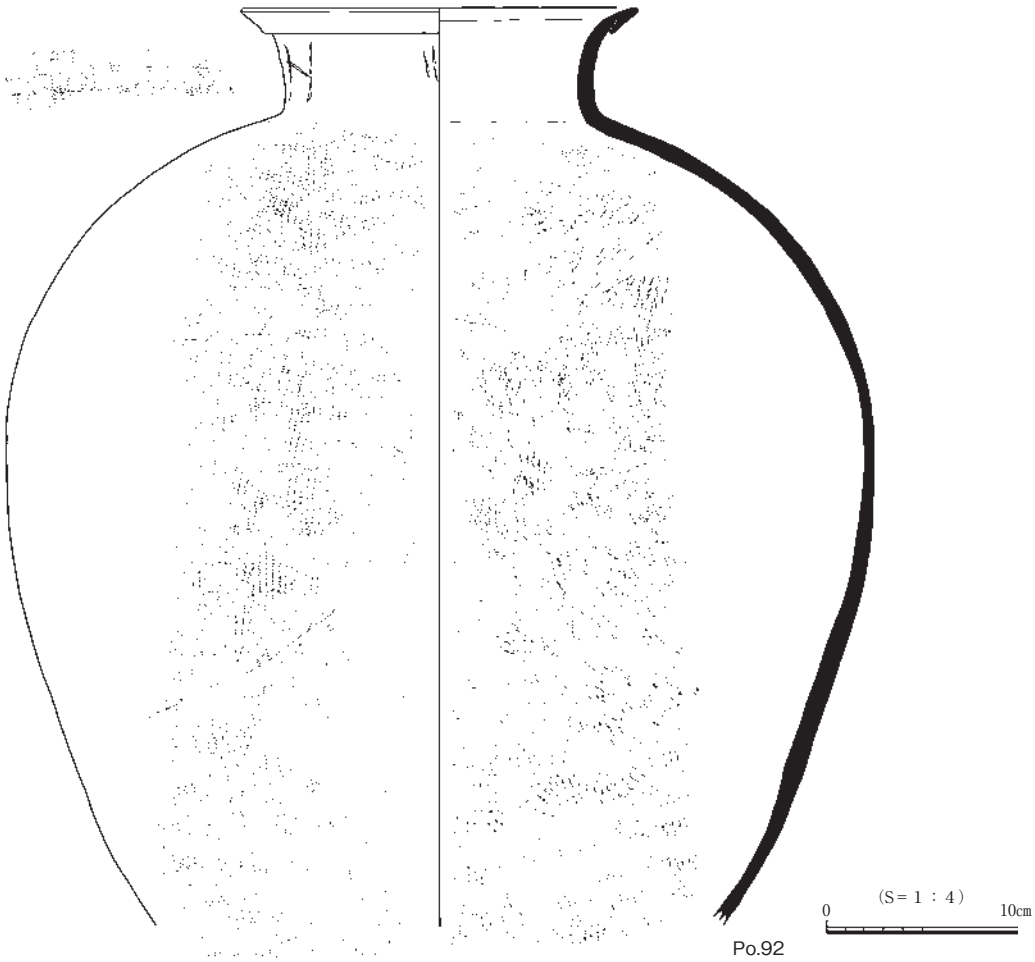
第20図　土坑１　平・断面図



第21図　土坑１　出土遺物図①



Po.91



Po.92

第22図　土坑１　出土遺物図②

第８節　三部長龍寺谷タタラ跡の調査（第23・24図）

三部長龍寺谷タタラ跡は、野上城跡の西側丘陵部に位置している。現地は山林であったが、表面観察の段階で、すでにタタラから排出された鉄滓がうず高く堆積している状況が見て取れた。調査前に現地を踏査した際には、表土に埋もれずに露出した鉄滓や炉壁が点在しており、この上を歩くと「ガチャ、ガチャ」と音がするほどであった。タタラの本体部分は、調査区北西側の民有地内に位置しているようだが、工事の対象範囲は、このタタラから排出された鉄滓の排滓場の縁辺をわずかにかすめた位置に当たる。

排滓場の範囲は、調査区内だけでも、長さ25m、幅７m、高さ３m以上に達しており、調査前から相当数の鉄滓が包蔵されていることが推測された。本来的には、これらの鉄滓は全点取り上げて報告・保管すべきものであろうが、調査範囲だけで500㎡を超える土量があり、相当数の遺物量になることと、報告後の保管場所を確保することができないことから、一部の鉄滓のみをコンテナー４箱分ほど持ち帰り、それ以外のものは現地にて全て廃棄した。

堆積状況　調査区内の堆積物は、鉄滓を主体としており、２カ所のトレンチを設定して層位を確認しながら調査を進めた。堆積土は褐色の砂質土が主体だが、基本的に鉄滓を多く含んでおり、鉄滓のみで土をほとんど含まない層も見られた。

調査終了後の断面観察では、西側の堆積層が古く、東側へ順次、鉄滓を投棄していった状況が窺えるが、最終的には、上面を標高136.3mのラインでフラットに整形した後、再び鉄滓が投棄されている状況であった。

出土遺物　排滓場から出土した鉄関連遺物は、少なくとも製錬系と鋳造系の２種類に分けることができる。精錬系の遺物は、箱形炉の炉壁、流出孔滓、流出溝滓などが出土している。炉壁はスサを含まないもので、円形の通風孔を確認することができる。

鋳造系は、溶解炉の炉壁や炉底滓（もしくは炉壁・炉底部）、流動滓などが出土している。溶解炉の炉壁にはクライ部分を確認することができ、炉底滓を含めた鉄滓が付着しているものがあることから、鉄鋳物用の溶解炉とみられる。ただし、内面のガラス質滓が紫紅色を呈する炉壁片もあり、鋳銅用の溶解炉が存在した可能性もある。

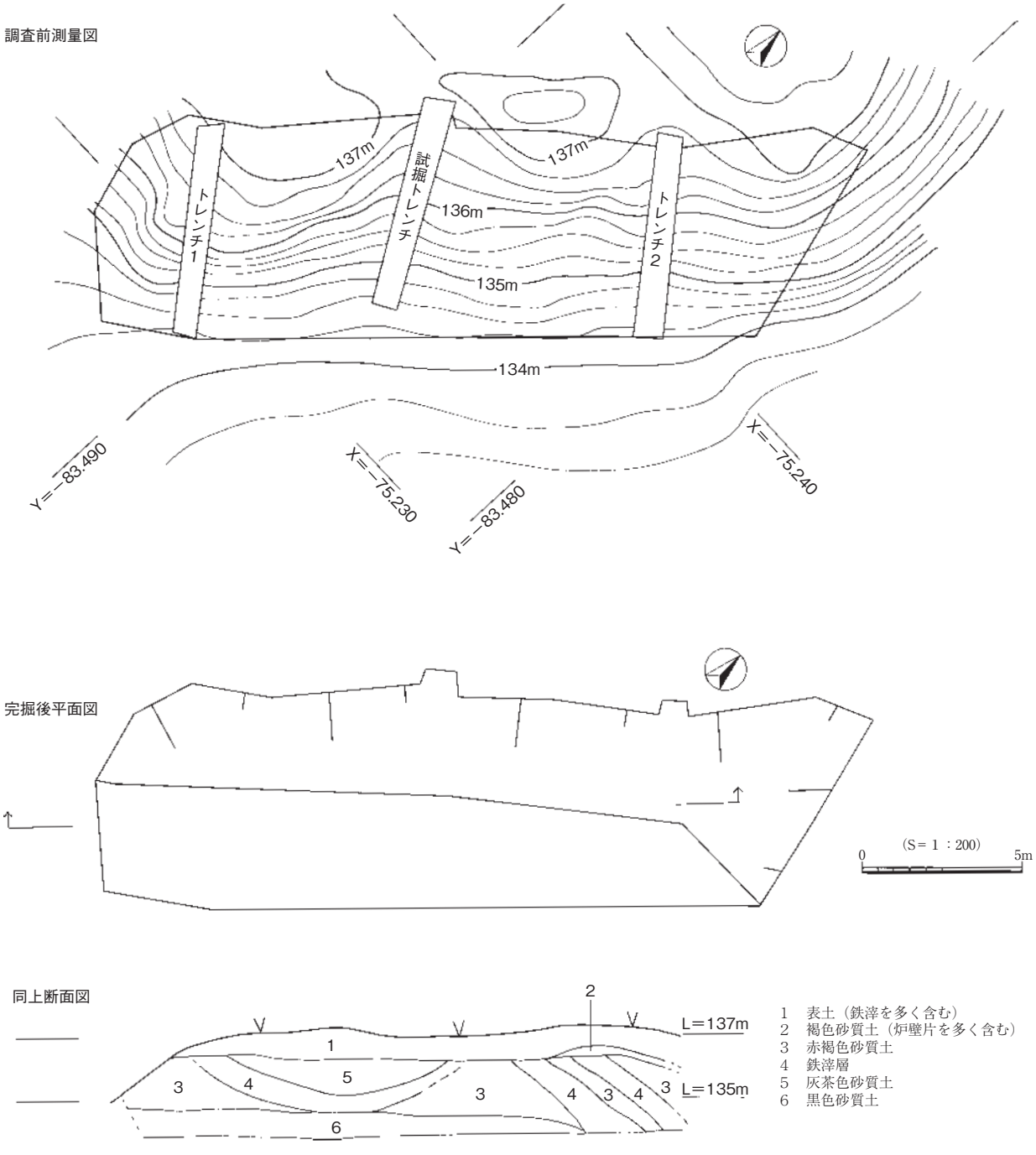
以上の所見から、従来から知られていた製鉄のみならず、鋳造も遺跡周辺で行われていたことが明らかとなったが、両者の時期的な関係は明らかにできなかった。

鉄滓以外の出土遺物については、Po.93が碁笥底の青花皿で、トレンチ２の最下層から出土しており、タタラの操業以前のものと考えられる。Po.94は、伊万里焼の小坏。Po.95は肥前系の磁器碗。Po.96は、肥前系の仏飯器。この３点の磁器は、いずれも近世後半から幕末頃のものと考えられる。G.1は、ガラス製の牛乳瓶である。このガラス製牛乳瓶は、全高14cm、口径4.1cm、底径4.5cmを測り、無色透明のガラスで、側面に合わせ目がある。表面には「鏡陵ミルク」、裏面に「要冷蔵」の文字が青色でプリントされており、底部付近には「㊟180cc　011：Y40」の陽刻がある。

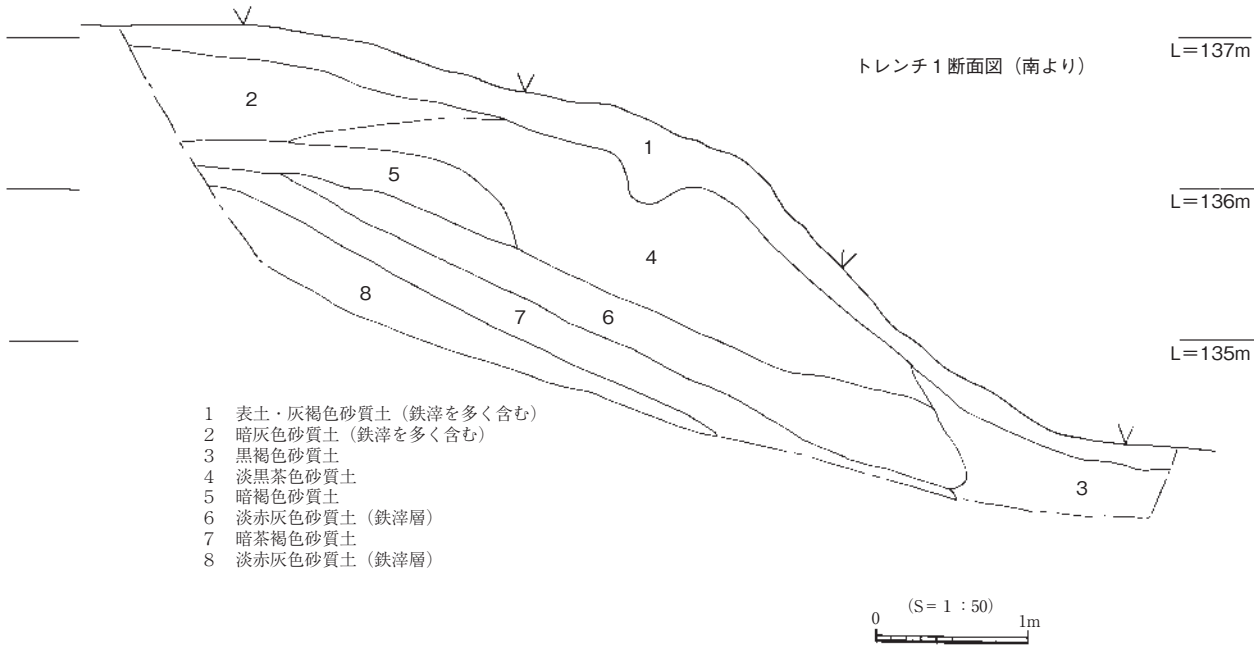
この「鏡陵ミルク」銘の牛乳瓶については、日野町にある日野産業高等学校（現日野高等学校）の酪農実習で搾乳された牛乳が一般向けに販売されていた時期があり、その時に使用された容器と考え

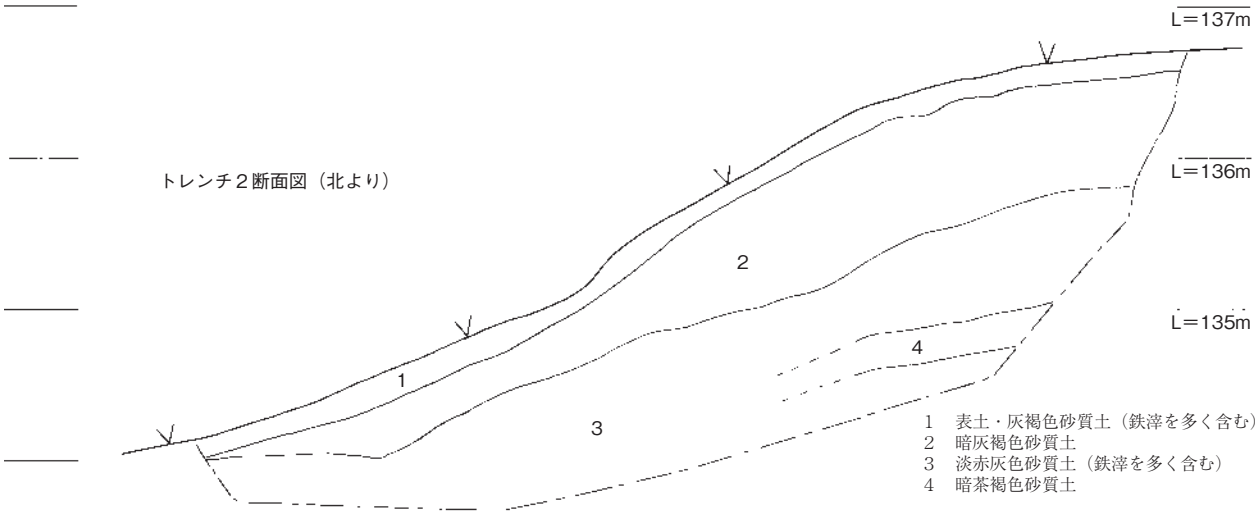
られた。全国の牛乳販売業者を網羅した、昭和37年版『全国乳業年間』には、日野産業高等学校の名があることから、昭和36年以降にはすでに販売されていたことが推測される。また、日野産業高校の卒業生で、現在日野高等学校の教諭である木村三三男氏のご教示によると、昭和51年頃までは校内で販売していたということであった。

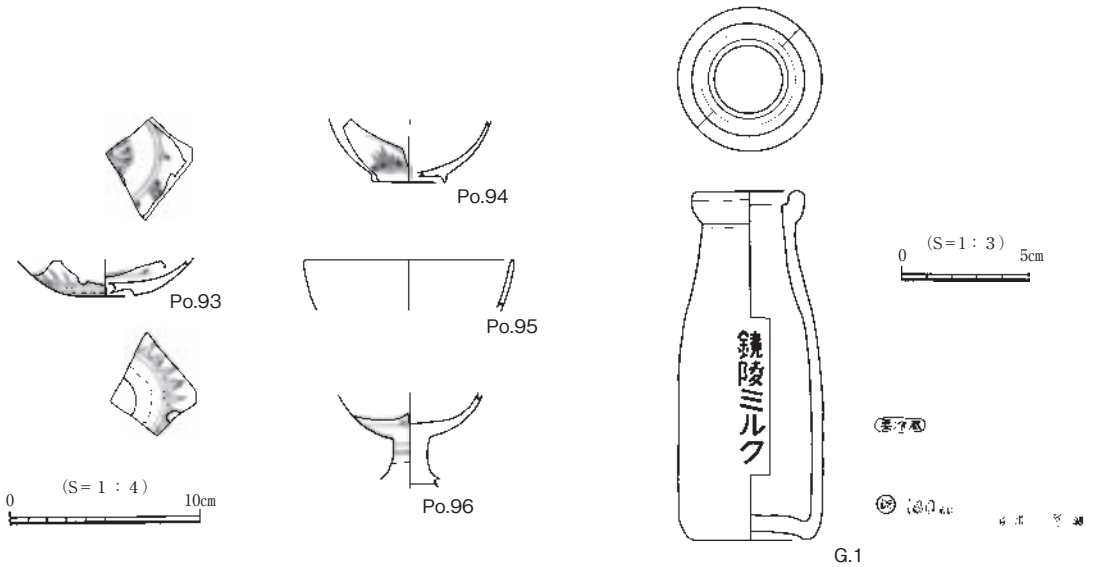
この牛乳瓶の年代については、昭和45年に牛乳瓶の容量が200ccに統一されていることから、昭和30年代半ばから昭和45年頃まで使用されたものと考えられる。一般的にこうした牛乳瓶は、使用後に回収され、洗浄後に牛乳瓶として再利用されるが、最終的には、溶解して新たなガラス瓶として生まれ変わることから、こうした回収瓶の現存数は少ないものと考えられる。



第23図　三部長龍寺谷タタラ跡　平・断面図







第24図　三部長龍寺谷タタラ跡　断面図・遺物図

第４章　自然科学分析

第１節　野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木材はセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は炭化しても解剖学的形質が残存し、同レベルの同定が可能となる。木材および炭化材は大型遺体にあたり、花粉などの微遺体と比較して移動性が少ないことから、近隣の森林植生や利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、三部長龍寺谷タタラ跡で検出された近世の鈩に伴う排滓場および野上城跡で検出された７世紀から８世紀にかけての土坑より出土した炭化材について、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。

２．試料と方法

試料は、三部長龍寺谷タタラ跡・野上城跡から採取されたサンプル①～④の４点であり、サンプル①～③は三部長龍寺谷タタラ跡出土、サンプル④は野上城跡出土のものである。

方法は、試料の横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面を落射顕微鏡によって40～1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結　果

１）サンプル①～③（三部長龍寺谷タタラ跡）

３試料とも硬質の炭であり、製炭された木炭であった。これらの試料はできる限り最小限の割裂に留め、樹種同定を行った。３試料とも同じ樹種で、以下のようである。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。ただしサンプル①には観察範囲には垂直樹脂道が分布しない。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔が窓状で、放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものがあり紡錘形を呈する。放射組織は熱により膨らむものが観察される。以上の形質よりアカマツに同定される。

表１　三部長龍寺谷タタラ跡・野上城跡出土炭化材の樹種同定結果

遺　跡	試料番号	結　果（学名/和名）		重　さ	備　考
三部長龍寺谷タタラ跡	サンプル①	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ	7.19g	硬質の木炭
	サンプル②	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ	13.43g	
	サンプル③	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ	4.32g	
野上城跡	サンプル④	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ	0.95g	軟質の消し炭状

２）サンプル④（野上城跡）

この試料は軟質の炭で、いわゆる消し炭である。少量であるため割裂せずに３断面の観察を行った。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が１列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔が単穿孔が観察され、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものが方形細胞となる。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部の細胞のみが異性となる異性放射組織型で、幅は数細胞幅である。以上の形質よりケヤキに同定される。

４．考　察

三部長龍寺谷タタラ跡出土の炭化材３点（サンプル①～③）は、いずれもアカマツであった。３点とも同じ樹種であり、選択された用材と考えられる。また、いずれも硬質の木炭であり、炭窯で作られたものと考えられる。アカマツの木炭は、火が起きやすく火力が強く、近代まで鍛冶炭として用いられている。なお、アカマツは自然状態では土壌の痩せた岩山などに生育し、同様に土壌の痩せた地域で疎林状の二次林を形成し、また造林としては里山林として分布する。

野上城跡出土の炭化材（サンプル④）はケヤキであった。軟質の炭であり、消し炭の状態である。何らかで燃焼した燃えかすとみなされる。ケヤキは温帯域の適潤地に生育する落葉高木である。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20–48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49–100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242.

第２節　野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡における年代測定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、三部長龍寺谷タタラ跡で検出された近世の鉧に伴う排滓場および野上城跡で検出された７世紀から８世紀にかけての土坑の年代を明らかにする目的で、出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料は、三部長龍寺谷タタラ跡の排滓場に設定されたトレンチ断面の鉄滓層１より出土した炭化材３点と野上城跡で検出された奈良時代の土坑１より出土した炭化材１点である。

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

試料名	対象物	種　類	前処理・調整	測定法
№１	サンプル①	炭化物（アカマツ）	超音波洗浄，酸―アルカリ―酸処理	AMS
№２	サンプル②	炭化物（アカマツ）	超音波洗浄，酸―アルカリ―酸処理	AMS
№３	サンプル③	炭化物（アカマツ）	超音波洗浄，酸―アルカリ―酸処理	AMS
№４	サンプル④	炭化物（ケヤキ）	超音波洗浄，酸―アルカリ―酸処理	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．測定結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図１には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（年BP）の算出には、^{14}C

の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　測定結果

試料名	測定No. (PED-)	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦） １σ（68.2%確率）	 ２σ（95.4%確率）
No.1	22601	−25.44±0.17	117±17	115±15	AD1690–1730（16.0%） AD1810–1890（45.3%） AD1910–1930（ 6.9%）	AD1680–1740（27.2%） AD1800–1930（68.2%）
No.2	22602	−26.95±0.14	118±17	120±15	AD1680–1730（16.8%） AD1800–1820（ 6.3%） AD1830–1890（38.0%） AD1910–1930（ 7.1%）	AD1680–1740（27.3%） AD1800–1930（68.1%）
No.3	22603	−27.09±0.15	101±17	100±15	AD1690–1730（26.6%） AD1810–1850（19.5%） AD1870–1920（22.1%）	AD1690–1730（27.1%） AD1800–1930（68.3%）
No.4	22604	−26.97±0.15	1290±18	1290±20	AD675–710（41.0%） AD745–770（27.2%）	AD660–780（95.4%）

BP：Before Physics（Present），AD：紀元

４．所　見

三部長龍寺谷タタラ跡と野上城跡で出土した炭化材（アカマツとケヤキ）について、加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、三部長龍寺谷タタラ跡出土の炭化材のうちサンプル①は、115±15年BP（２σの暦年代でAD1680～1740年、AD1800～1930年）、サンプル②は、120±15年BP（２σの暦年代でAD1680～1740年、AD1800～1930年）、サンプル③は、100±15年BP（２σの暦年代でAD1690～1730年、AD1800～1930年）、野上城跡出土の炭化材は、1290±20年BP（２σの暦年代でAD660～780年）の年代値が得られた。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy： The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3–20，日本第四紀学会．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代，3–20．

尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費　弥生農耕の起源と東アジア№３―炭素年代測定による高精度編年体系の構築―，p. 14–15．

Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26–0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029–1058.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G. S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111–1150.

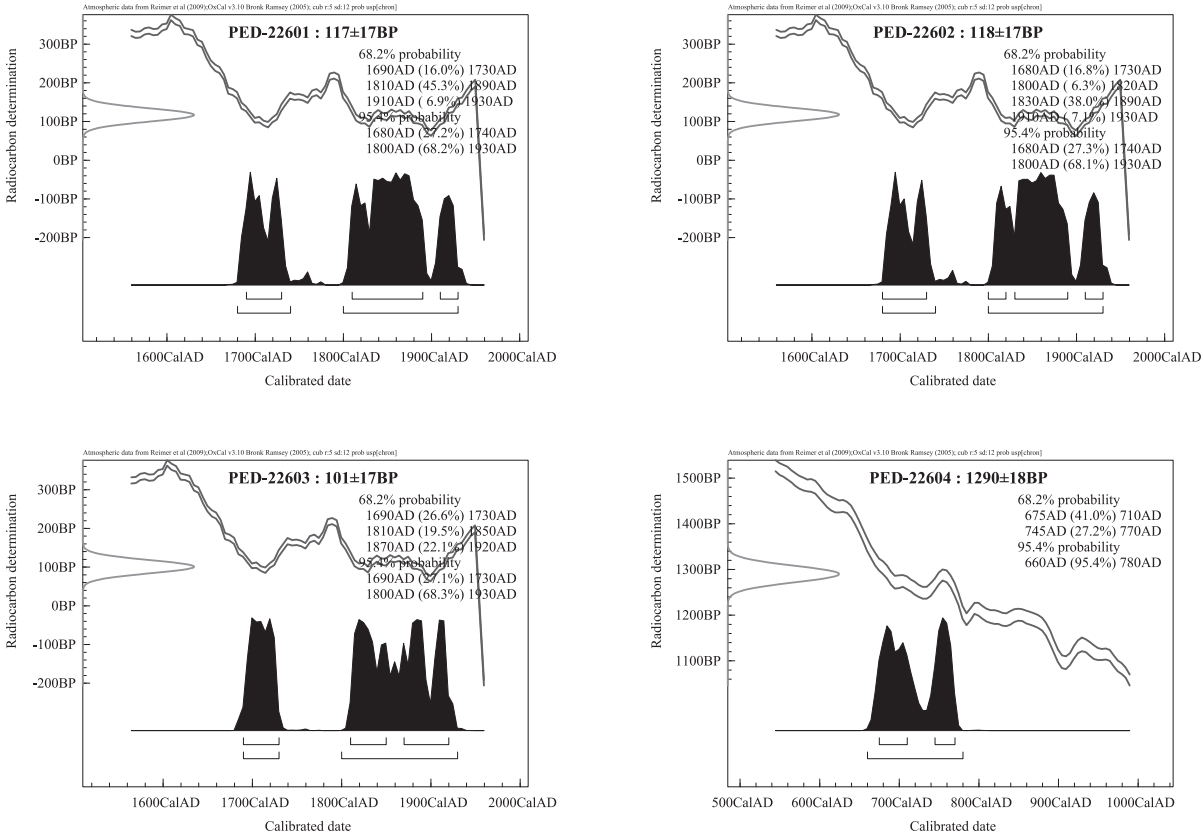


図１　暦年較正結果

第５章　総括

第１節　野上城跡の調査

野上城跡は、『日野郡史』に野上安左衛門尉高続の居城とされ、戦国期には野上長龍が在城したと伝わるが、これまで発掘調査が行われたことが無く、築城や廃城の時期は全くわかっていなかった。

野上城跡の構造については、鳥取県中世城館分布調査報告書に示された縄張り図を見ると、三部神社の境内から北へ続く尾根上に、二つの郭が連続して配置されていることが分かる。主郭に相当する山頂部の郭は、30m程の平坦地を確保し、北側と西側には土塁が造られている。また、主郭の北側は堀切によって大きく区画されているが、一部には土橋が残る。主郭の南に位置する副郭は、神社の北側に土塁を持つ郭群が複雑に入り組んでおり、斜面部に下りた場所にも小さな郭が連続して造られている。こうした状況から、更に下の斜面にまで郭が続く可能性が考えられた。

今回の発掘調査は、この野上城の南側斜面の一部を調査し、Ｃ区とＥ区において、郭が連続して造られていたことを明らかにした。郭群はいずれも小規模なものではあったが、Ｅ区では３つの郭が段差を持って構成されており、城郭構造の一端を示している。

野上城の築城年代については、郭の盛土から出土した遺物から、概ね16世紀代に収まるものであり、近世前半頃には廃絶していたものという見通しを得た。

16世紀前半から中頃にかけての西伯耆地方は、尼子氏から毛利氏へと覇権が移り変わる時期であり、伯耆領内の各所において緊張状態が高まった時期であった。また、野上城の立地は、溝口と日野を結ぶルートと旧会見町から出雲へと抜ける富田街道との交点に当たる要所であり、ここに城を築くことが、戦略上、重要であったと考えられる。

Ｅ区で検出された土坑については、埋土中から完形品の須恵器壺など多数の遺物が出土したことから、野上城の近辺に古代の遺跡が存在していることが推測された。三部地区一帯は、野上川が流れる古代野上郷の遺称地にあるため、この地域における古代遺跡の発見は重要な意味を持つ。

今回検出した土坑については、建物火災などによって生じた燃え残りなどを一括して廃棄した土坑と考えられるが、岩盤層を大きく掘削して造られており、廃棄土坑としては規模が大きすぎる。また、完形品の須恵器小型壺（Po.86）は、類例の少ないものであり、やや特殊な遺構であったという印象を受ける。丘陵の斜面において集落が展開する事例は、米子市の陰田遺跡群などで顕著に認められており、丘陵斜面にテラス状の段を設けて建物を建てる方式は、古代においては一般的なものであったと考えられる。今回の遺構は、テラスや建物跡を伴わず、単独で存在する遺構であるが、野上城周辺においても、陰田遺跡群と同様の立地に集落が展開している可能性を視野に入れるべきであろう。

第２節　三部長龍寺谷タタラ跡の調査

三部長龍寺谷タタラ跡は、わずかに排滓場の一部を調査したのみで、タタラの本体を検出することは出来なかったが、出土した遺物から幕末頃に廃絶したタタラ跡と推測された。

伯耆町内では、旧溝口町に所在するタタラが50例を超えており、三部地区でも三部神社の東側に中山鍛冶場が知られている。また野上川上流域一帯では、三部から南西に500mほどの地点に位置する船越の集落でも６ヶ所のタタラが近接して確認されており、三部地区の周辺は、伯耆町内でも製鉄遺跡が集中する地域であるが、これらのタタラ跡は発掘調査された事例が無いため、操業期間や経営内容について考察することができなかった。

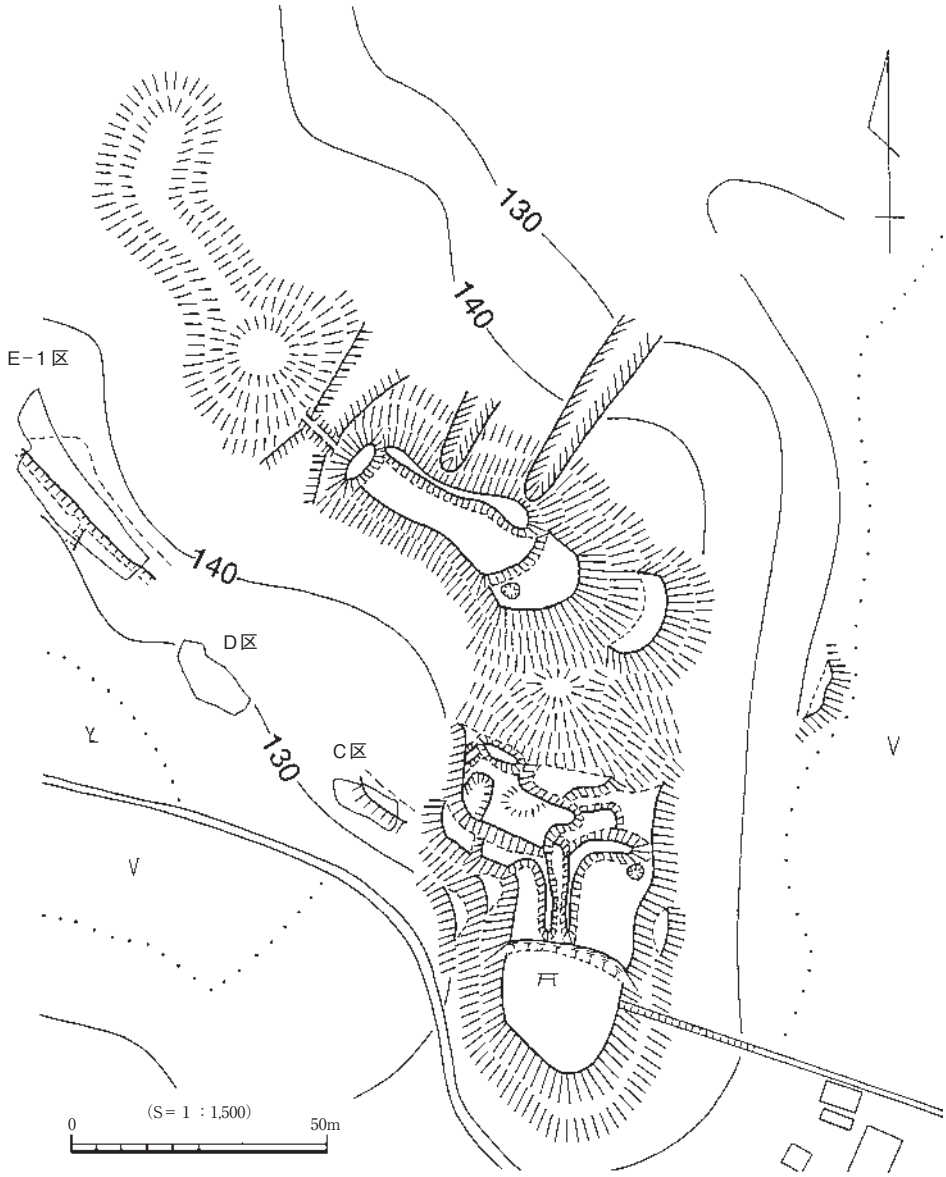
今回の調査によって、三部長龍寺谷タタラ跡では、製錬工程のみならず、鋳造過程を示す遺物が出土したことから、製鉄と鋳鉄の両方を行っていた可能性が高いことが判明した。周辺では、平成22年に伯耆町教育委員会によって発掘調査された三部古城山遺跡でも、近世初頭の鋳造工房跡が確認されており、伯耆町内のタタラの特徴として認識できるのか、今後注意すべき問題と考える。

参考文献

2004年　大川泰広ほか『鳥取県中世城館分布調査報告書　第２集』鳥取県教育委員会

2012年　長田康平『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』伯耆町教育委員会

2013年　長田康平『三部古城山遺跡発掘調査報告書』伯耆町教育委員会



第25図　野上城　略測図（『鳥取県中世城館分布調査報告書　第２集』より一部改変）

表１　野上城跡　出土土器・土製品・陶磁器観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色　調	調　整		備　考
					口径	底径	器高		内　面	外　面	
第５図	Po.１	Ａ区	９層	弥生土器・甕	(14.6)		(１.５)	暗灰褐色	ナデ	剥離のため不明	
第５図	Po.２	Ａ区	９層	土師器・坏身			(１.３)	淡茶灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	内外面とも赤色塗彩
第５図	Po.３	Ａ区	１層	土師器・移動式竈			(６.８)	淡赤灰色	ケズリ	タテハケ	
第５図	Po.４	Ａ区	１層	土師器・把手			(３.８)	淡赤灰色		ナデ	
第５図	Po.５	Ａ区	９層	須恵器・坏身	(10.0)		(２.４)	暗灰色	ナデ	ナデ	
第５図	Po.６	Ａ区	１層	須恵器・坏身		(７.４)	(１.６)	淡灰褐色	ナデ	ナデ、底部糸切り	
第５図	Po.７	Ａ区	１層	須恵器・甕			(７.６)	淡黒灰色	ナデ、当て具痕	ナデ	
第６図	Po.８	Ｂ区	表土	縄紋土器・深鉢			(３.４)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
第６図	Po.９	Ｂ区	表土	土師器・坏身		3.8	(１.１)	明灰褐色	ナデ	底部糸切り	
第６図	Po.10	Ｂ区	表土	磁器・碗		3.7	(２.８)	白灰色	ナデ	ナデ	肥前産
第６図	Po.11	Ｂ区	表土	陶器・皿	12.7	4.5	3.5	暗茶灰色	ナデ、見込釉剥ぎ	ケズリ	銅緑釉皿
第８図	Po.12	Ｃ区	表土	須恵器・坏身			(２.５)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
第11図	Po.13	Ｄ区	表土	縄紋土器・深鉢			(６.１)	明灰茶色	ナデ	押型紋	
第11図	Po.14	Ｄ区	表土	土師器・坏身		(10.2)	(２.１)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	底部以外は赤色塗彩
第11図	Po.15	Ｄ区	表土	土師器・坏身		(９.４)	(２.０)	淡茶灰色	ナデ	底部ナデ	底部以外は赤色塗彩
第11図	Po.16	Ｄ区	表土	須恵器・坏身	(18.0)		(２.８)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第11図	Po.17	Ｄ区・古墓２	周溝内	須恵器・坏身		(10.8)	(１.１)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
第11図	Po.18	Ｄ区	表土	須恵器・坏身	(11.2)		(２.６)	暗灰色	ナデ	ナデ	
第11図	Po.19	Ｄ区	表土	陶器・甕			(５.５)	灰色	ナデ	ナデ	瓷器系陶器
第15図	Po.20	Ｅ−１区	表土	須恵器・坏蓋	(16.2)		(１.８)	明灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
第15図	Po.21	Ｅ−１区	表土	須恵器・甕	(20.8)		(５.０)	暗黒灰色	ナデ	ナデ	

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
					口径	底径	器高		内面	外面	
第15図	Po. 22	E-１区	表土	土師器・甕	(22. 3)		(2. 9)	暗赤褐色	ナデ	ナデ	
第15図	Po. 23	E-１区	表土	磁器・碗	(14. 4)		(1. 5)	白色	ナデ	ナデ	中国産
第15図	Po. 24	E-１区	表土	陶器・皿		4. 2	(2. 0)	淡赤褐色	ナデ	ケズリ	唐津焼、砂目積
第15図	Po. 25	E-３区	表土	土師器・鉢	(20. 6)		(5. 9)	淡橙灰色	ケズリ	ナナメハケ	
第15図	Po. 26	E-３区	表土	土師器・甕	(24. 5)		(2. 0)	明灰色	ヨコハケ後ナデ	風化	
第15図	Po. 27	E-３区	表土	土師器・坏身		3. 9	(1. 0)	淡茶灰色	ナデ	糸切り	
第15図	Po. 28	E-３区	表土	磁器・碗		(4. 0)	(1. 6)	白色	ナデ	畳付に砂付着	中国産
第15図	Po. 29	E-３区	表土	陶器・天目茶碗	(11. 8)		(3. 4)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	瀬戸・美濃系
第15図	Po. 30	E-３区	表土	陶器・皿		(4. 0)	(2. 6)	淡赤褐色	ナデ	ケズリ	唐津焼、鉄絵
第15図	Po. 31	E-３区	表土	陶器・碗		(4. 6)	(2. 9)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	肥前産
第15図	Po. 32	E-４区	表土	土師器・皿	(13. 2)		(1. 9)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩
第15図	Po. 33	E-４区	表土	青磁・碗		(4. 2)	(2. 1)	暗緑灰色	ナデ	底部ケズリ	中国産
第18図	Po. 34	E-１区・トレンチ３	盛土中	須恵器・坏身	(12. 7)		(2. 0)	淡白灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 35	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・坏蓋		(8. 3)	(2. 4)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 36	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・坏身		(7. 8)	(2. 8)	淡白灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 37	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・坏身		(8. 5)	(2. 0)	暗灰色	ナデ	底部糸切り	
第18図	Po. 38	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・皿	(13. 2)	(9. 6)	2. 1	淡灰色	ナデ	底部静止糸切り	
第18図	Po. 39	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・坏蓋			(1. 2)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 40	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・坏身	(17. 2)		(1. 1)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 41	E-１区・トレンチ５	盛土中	須恵器・壺			(4. 6)	暗灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 42	E-１区・トレンチ５	盛土中	須恵器・短頸壺		(12. 6)	(3. 4)	暗灰色	当て具痕	タタキ	
第18図	Po. 43	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	須恵器・長頸壺		(10. 0)	(6. 6)	灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po. 44	E-１区・トレンチ２～３間	盛土中	弥生土器・底部		(7. 6)	(3. 2)	淡橙灰色	ミガキ	ケズリ	
第18図	Po. 45	E-１区・トレンチ５	盛土中	土師器・坏身	(15. 3)		(2. 1)	淡橙褐色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
					口径	底径	器高		内面	外面	
第18図	Po.46	E-1区・トレンチ5	盛土中	土師器・坏身		(11.4)	(4.6)	橙褐色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩
第18図	Po.47	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・坏身	(10.3)	(5.4)	3.1	淡灰茶色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩
第18図	Po.48	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・坏身	(13.6)		(3.6)	淡白灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.49	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・坏身		(8.2)	(1.9)	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.50	E-1区・トレンチ2	盛土中	土師器・皿	(12.9)		(2.5)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.51	E-1区・トレンチ2	盛土中	土師器・皿	(12.8)		(2.4)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.52	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・坏身	(12.1)		(2.4)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩
第18図	Po.53	E-1区・トレンチ2	盛土中	土師器・甕	(11.2)		(2.1)	暗黒褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
第18図	Po.54	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・甕	(23.0)		(5.1)	淡橙灰色	ハケ後ナデ	ナデ	
第18図	Po.55	E-1区	盛土中	土師器・甕	(22.6)		(5.7)	淡灰褐色	ナデ	ハケ後ナデ	
第18図	Po.56	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・甕	(23.0)		(2.4)	淡橙褐色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.57	E-1区	盛土中	土師器・甕	(23.6)		(2.4)	淡橙灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.58	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・甕	(24.2)		(3.1)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.59	E-1区・トレンチ3	盛土中	土師器・甕	(25.0)		(4.5)	明茶灰色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.60	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・甕	(30.8)		(4.4)	淡橙灰色	ナデ	ハケ	
第18図	Po.61	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・鍋	(35.1)		(3.2)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
第18図	Po.62	E-1区・トレンチ3	盛土中	土師器・鍋			(6.7)	淡灰茶色	指押さえ	ハケ	
第18図	Po.63	E-1区・トレンチ3	盛土中	土師器・土錘			4.1	淡灰茶色		ナデ	
第18図	Po.64	E-1区・トレンチ2～3間	盛土中	土師器・土錘			5.2	淡灰茶色		ナデ	
第19図	Po.65	E-1区・トレンチ3	盛土中	白磁・皿	(14.6)		(2.1)	暗灰色	ナデ	ナデ	中国産
第19図	Po.66	E-1区・トレンチ2	盛土中	白磁・皿	(13.7)		(1.7)	白色	ナデ	ナデ	中国産
第19図	Po.67	E-1区・トレンチ2	盛土中	青磁・碗	(14.1)		(5.3)	白色	ナデ	ナデ	中国産
第19図	Po.68	E-1区・トレンチ3	盛土中	磁器・碗		(4.4)	(4.2)	淡白灰色	ナデ	ナデ	肥前産
第19図	Po.69	E-1区・トレンチ3	盛土中	陶器・天目茶碗	(11.1)		(2.6)	茶灰色	ナデ	ナデ	瀬戸・美濃系

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
					口径	底径	器高		内面	外面	
第19図	Po. 70	E-1区・トレンチ3	盛土中	陶器・碗			(4.4)	明灰色	ナデ	ナデ	瀬戸・美濃系
第19図	Po. 71	E-1区・トレンチ3	盛土中	陶器・皿		(4.0)	(2.0)	赤灰色	ナデ	底部ケズリ	唐津焼、胎土目積
第19図	Po. 72	E-1区・トレンチ2	盛土中	陶器・碗		(4.9)	(5.2)	暗灰色	ナデ	底部ケズリ	肥前産
第19図	Po. 73	E-1区・トレンチ2	盛土中	陶器・碗			(4.2)	暗灰色	ナデ	ナデ	肥前産
第19図	Po. 74	E-1区・トレンチ3	盛土中	陶器・擂鉢	(30.7)		(5.3)	赤褐色	ナデ	ナデ	備前焼
第21図	Po. 75	E-1区・土坑1	埋土中	土師器・坏身	(12.0)		(3.8)	淡橙灰色	ナデ	ナデ	内外面とも赤色塗彩
第21図	Po. 76	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏蓋	(18.6)		(2.8)	淡灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
第21図	Po. 77	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏蓋	(13.5)		(2.0)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 78	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏蓋	(12.7)		(1.8)	灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 79	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏蓋	(13.2)		(1.4)	暗灰茶色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 80	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏蓋	12.9		2.2	淡灰茶色	ナデ	ケズリ後ナデ	焼成不良
第21図	Po. 81	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏身	(15.8)		(4.7)	暗灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 82	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・坏身		(8.2)	(1.5)	淡灰茶色	ナデ	ナデ、底部糸切り	焼成不良
第21図	Po. 83	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・皿	(13.1)	(10.0)	2.1	淡灰茶色	ナデ	ナデ、底部糸切り	焼成不良
第21図	Po. 84	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・高坏？		(10.3)	(1.8)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 85	E-1区・土坑1	埋土中	土師器・甕	19.4		(16.3)	淡褐色	ナデ	タテハケ	
第21図	Po. 86	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・壺	5.8	6.3	9.4	暗灰色	ナデ	底部糸切り	被熱
第21図	Po. 87	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・長頸壺？	(12.1)		(2.8)	淡灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 88	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・長頸壺		(9.6)	(14.1)	淡白灰色	ナデ	ナデ	
第21図	Po. 89	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・壺	14.5		(24.2)	淡灰色	当て具痕	タタキ	焼台付着
第21図	Po. 90	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・甕			(9.7)	暗灰色	ナデ	ナデ、波状紋	
第22図	Po. 91	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・甕	(18.2)		(44.4)	灰色	当て具痕	タタキ	円形浮紋
第22図	Po. 92	E-1区・土坑1	埋土中	須恵器・甕	(20.8)		(48.6)	灰色	当て具痕	タタキ	頸部に線刻

表２　野上城跡　出土石製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別	法量（cm）			重量（g）	石　材
					最大長	最大幅	最大厚		
第14図	S.1	E−１区・古墓３	下層	石鏃	(0.8)	1.3	0.3	0.2	黒曜石
第19図	S.2	E−３区	表土	砥石	(3.1)	3.4	1.3	25.1	凝灰岩

表３　野上城跡　出土金属製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			現　　状
					最大長	最大幅	最大厚	
第６図	M.1	Ｂ区	表土	煙管・吸口	6.7	1.0	1.2	一部欠損
第11図	M.2	Ｄ区	表土	煙管・雁首	6.0	0.9	0.9	完存
第19図	M.3	E−３区	表土	棒状鉄器	(16.2)	1.2	1.1	全体に錆化著しい
第21図	M.4	E−１区・土坑１	埋土中	鉄製品	(6.1)	2.7	(2.4)	全体に錆化著しい

表４　野上城跡　出土木製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			樹種	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
第21図	W.1	E−１区・土坑１	埋土中	木製容器？	(8.0)	(3.9)	0.5	ケヤキ	炭化

表５　三部長龍寺谷タタラ跡　出土陶磁器観察表　（残存・復元値は（　）で表示）

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
					口径	底径	器高		内面	外面	
第24図	Po. 93	トレンチ２	地山直上	磁器・皿		(3.0)	(1.9)	暗灰色	ナデ	碁笥底	中国産
第24図	Po. 94	タタラ跡	表土	白磁・碗		(3.8)	(3.3)	暗白色	ナデ	ナデ	肥前産
第24図	Po. 95	タタラ跡	表土	磁器・碗	(11.0)		(2.7)	暗白色	ナデ	ナデ	産地不明
第24図	Po. 96	トレンチ２	表土	磁器・仏飯器			(5.0)	白色	ナデ	ナデ	産地不明

表６　三部長龍寺谷タタラ跡　出土ガラス製品観察表

挿図番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	備考
					口径	底径	器高		
第24図	G. 1	タタラ跡	表土	ガラス瓶・牛乳瓶	4.1	4.5	14.0	ほぼ透明	「鏡陵ミルク」銘の青字プリント

写 真 図 版

1．野上城跡の遠景（西上空より）

写真図版２

１．野上城跡Ａ区
調査風景（東より）

２．野上城跡Ａ区
完掘（東より）

３．野上城跡Ａ区
北側断面(南東より)

１．野上城跡Ｂ区完掘
（東より）

２．野上城跡Ｂ区
古墓１検出
（東より）

３．野上城跡Ｂ区
古墓１完掘
（南より）

写真図版４

１．野上城跡Ｃ区
郭１検出（東より）

２．野上城跡Ｃ区
郭１盛土断面
（西より）

３．野上城跡Ｃ区
郭１盛土除去後
（東より）

１．野上城跡Ｄ区　全景（写真上が北東）

写真図版６

１．野上城跡Ｄ区
調査前（南より）

２．野上城跡Ｄ区
礫群１検出
（南より）

３．野上城跡Ｄ区
古墓２検出
（南より）

１．野上城跡Ｄ区
古墓２周溝検出
（西より）

２．野上城跡Ｄ区
古墓２周溝検出
（北より）

３．野上城跡Ｄ区
古墓２墳丘断面
（北西より）

写真図版８

１．野上城跡Ｄ区
古墓２周溝完掘
（北より）

２．野上城跡Ｄ区
古墓２北東角部
（北より）

３．野上城跡Ｄ区
古墓２周溝完掘
（東より）

１．野上城跡Ｄ区
古墓２主体部断面
（西より）

２．野上城跡Ｄ区
古墓２主体部完掘
（西より）

３．野上城跡Ｄ区
古墓２完掘
（北より）

1．野上城跡E－1区　郭2～4検出（西上空より）

1．野上城跡E−１区
郭検出（西より）

2．野上城跡E−１区
郭２から郭３を見る
（北西より）

3．野上城跡E−１区
郭３と郭４の段差
（南より）

写真図版12

1．野上城跡E−１区
郭群検出
（北西より）

2．野上城跡E−１区
トレンチ２断面
（西より）

3．野上城跡E−１区
トレンチ３断面
（北より）

1．野上城跡E−１区
トレンチ４断面
（北より）

2．野上城跡E−１区
トレンチ５断面
（北より）

3．野上城跡E−１区
郭群盛土除去後
（北西より）

写真図版14

1．野上城跡E−1区
古墓3検出
（南西より）

2．野上城跡E−1区
古墓3下層
（西より）

3．野上城跡E−1区
古墓3最下層
（南より）

1．野上城跡E−１区
古墓３完掘
（西より）

2．野上城跡E−１区
土坑１検出
（西より）

3．野上城跡E−１区
土坑１完掘
（西より）

写真図版16

1．野上城跡E−２区
完掘
（北より）

2．野上城跡E−３区
礫群２検出
（南東より）

3．野上城跡E−４区
完掘　（北東より）

1．三部長龍寺谷タタラ跡調査前
（南西より）

2．三部長龍寺谷タタラ跡表土除去後
（東より）

3．三部長龍寺谷タタラ跡トレンチ１
（東より）

写真図版18

1．三部長龍寺谷タタラ跡トレンチ２（南より）

2．三部長龍寺谷タタラ跡トレンチ２（南より）

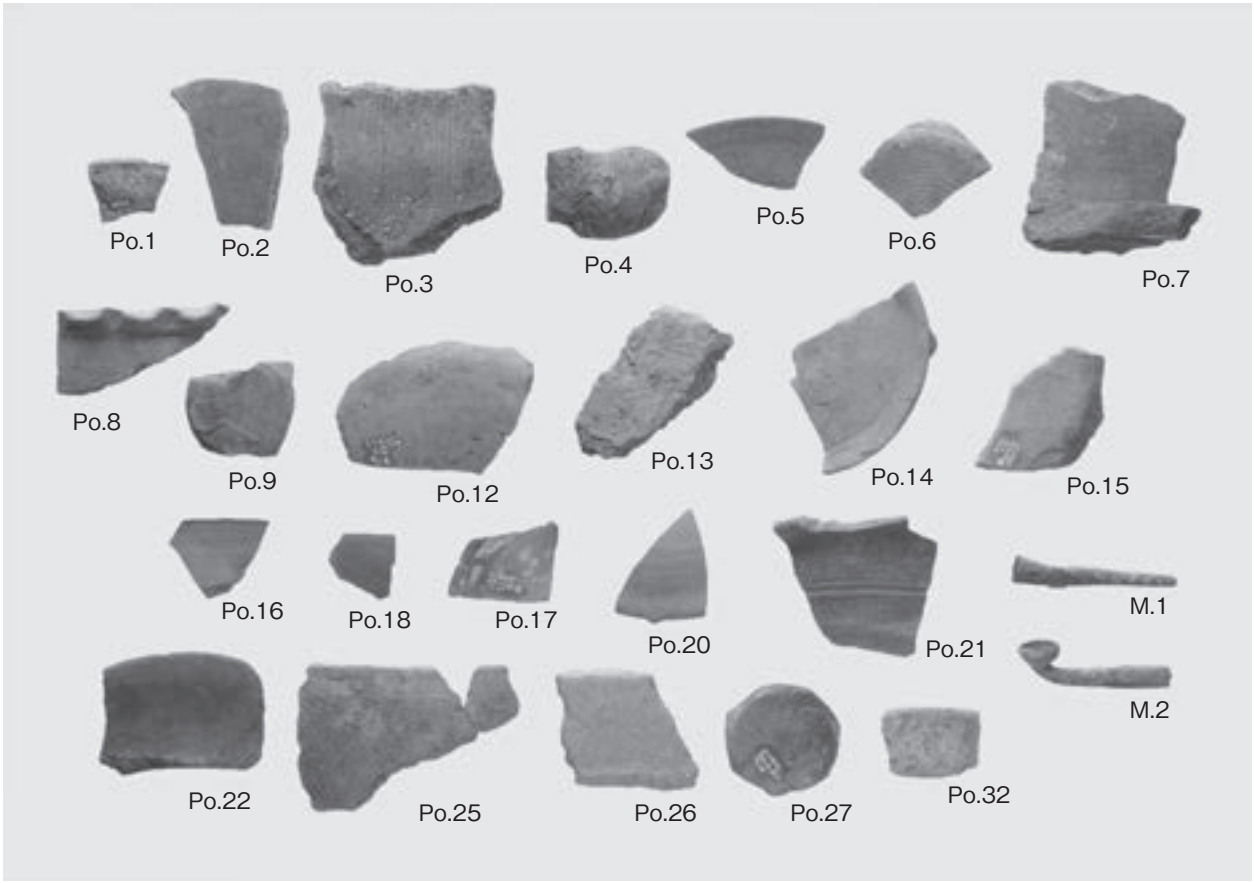
3．三部長龍寺谷タタラ跡排滓場完掘（南より）

1．三部長龍寺谷タタラ跡排滓場完掘（東より）

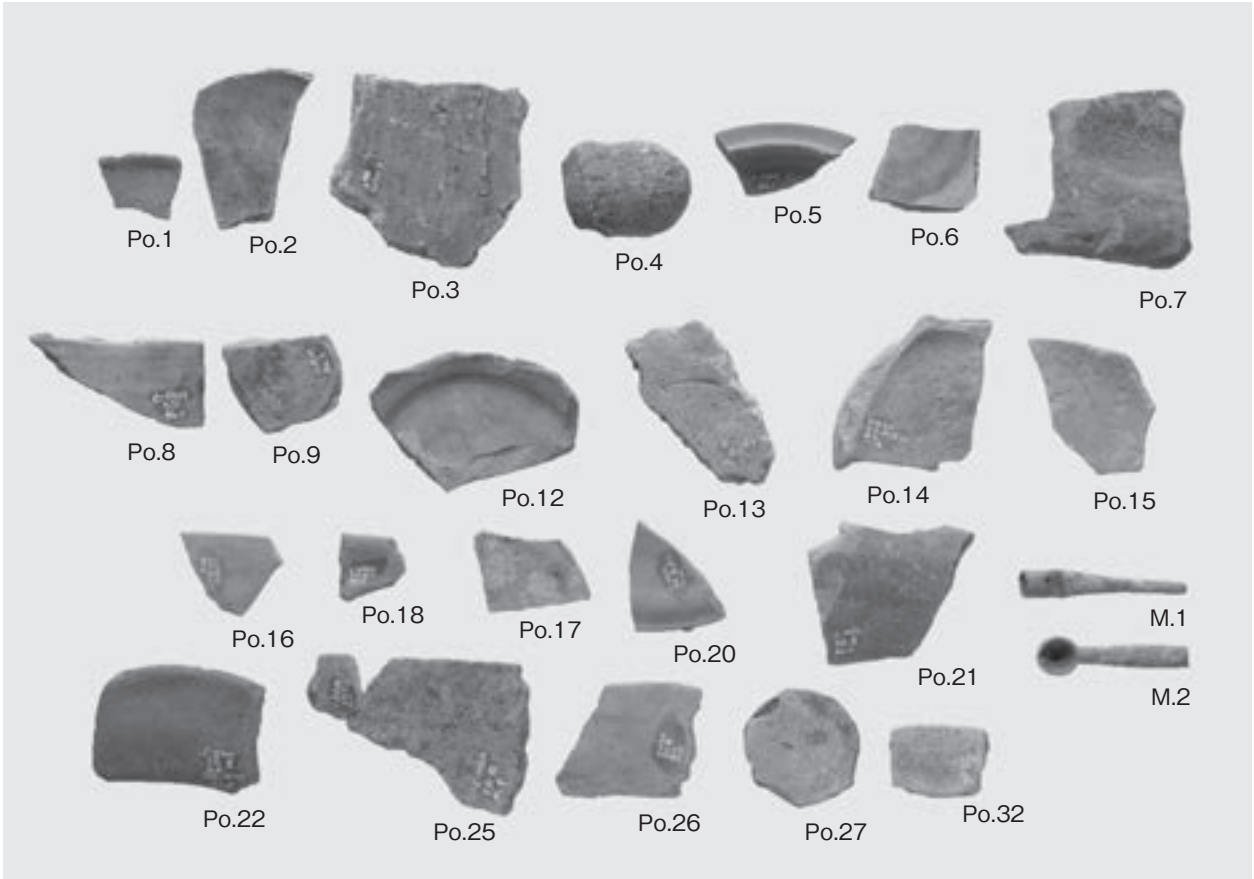
2．三部長龍寺谷タタラ跡排滓場完掘（南より）

3．三部長龍寺谷タタラ跡排滓場完掘（南より）

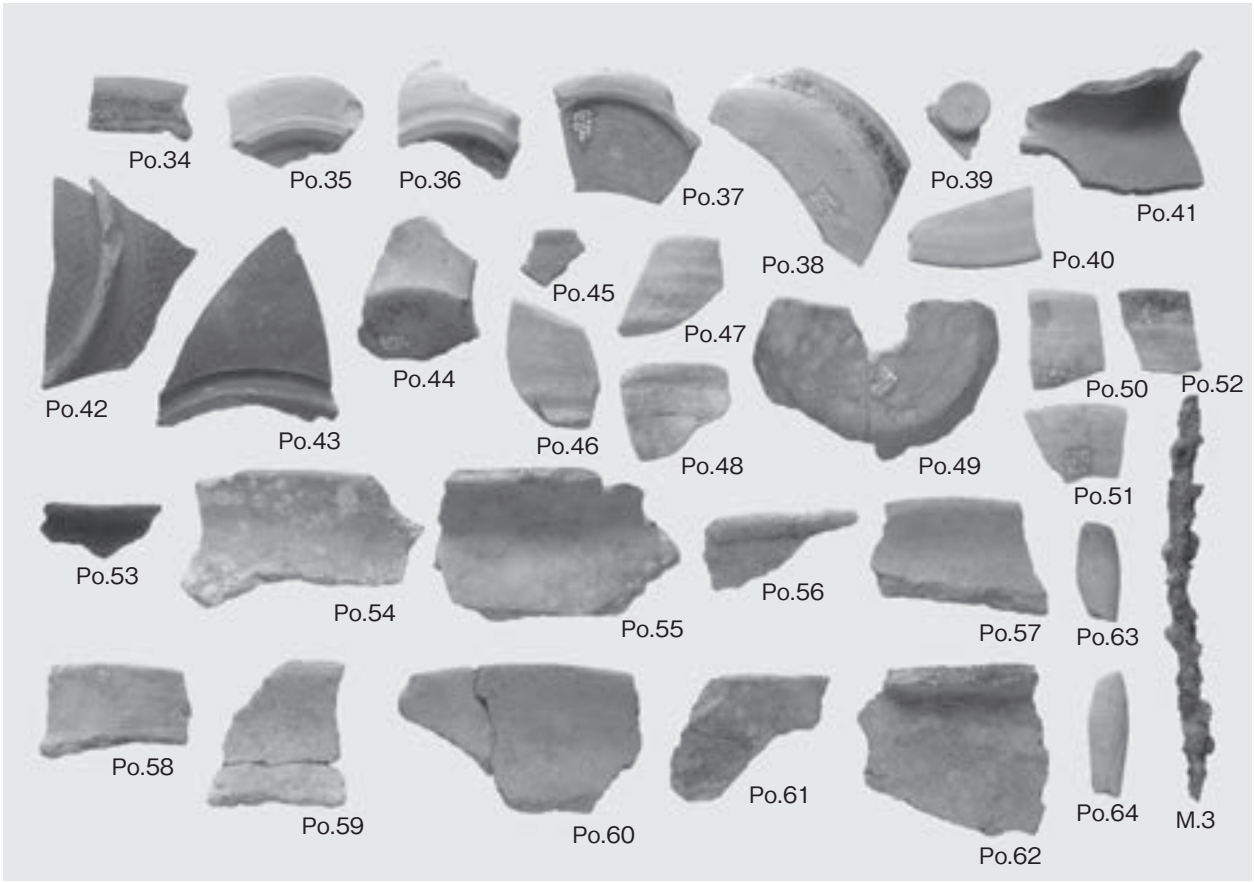
写真図版20



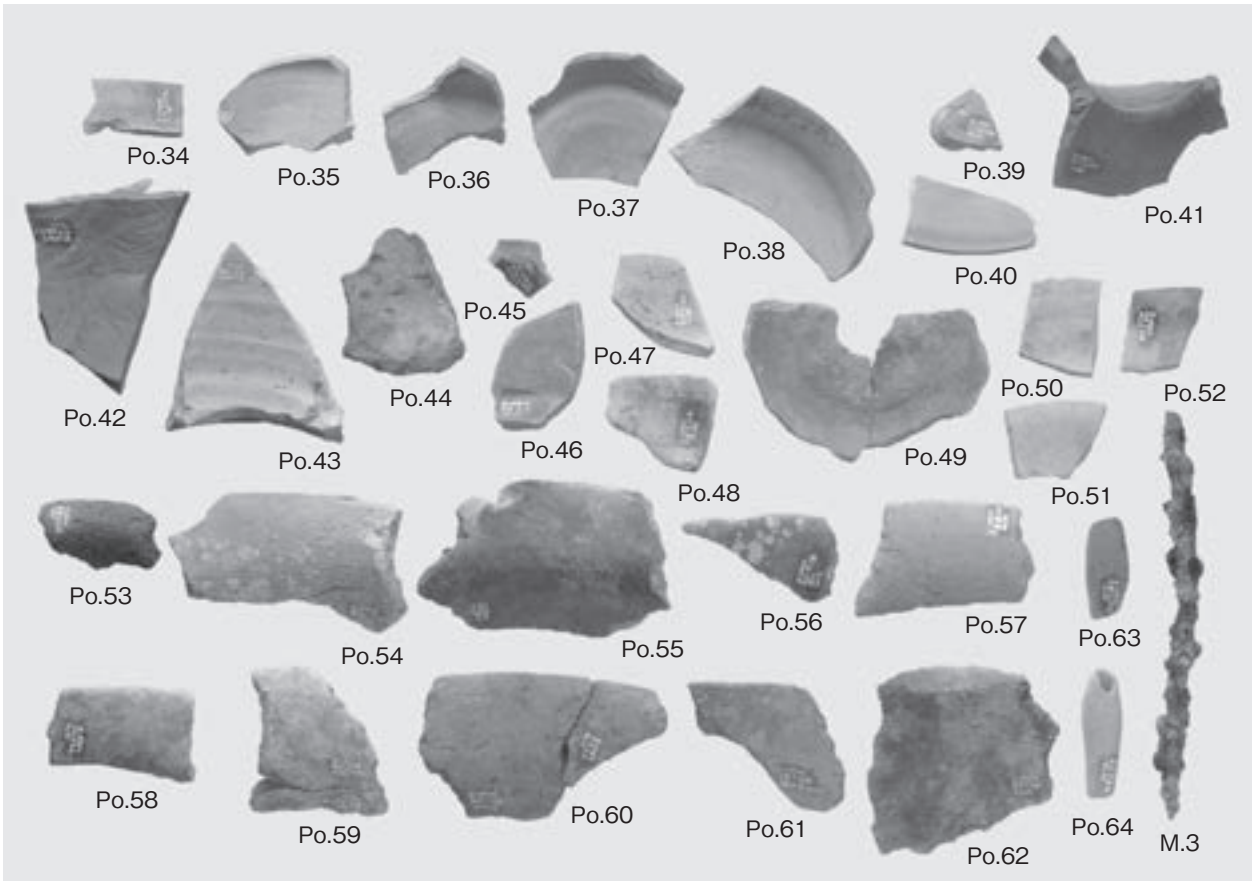
1．野上城跡Ａ区～Ｄ区　出土遺物表面（S＝１：３）



2．野上城跡Ａ区～Ｄ区　出土遺物裏面（S＝１：３）

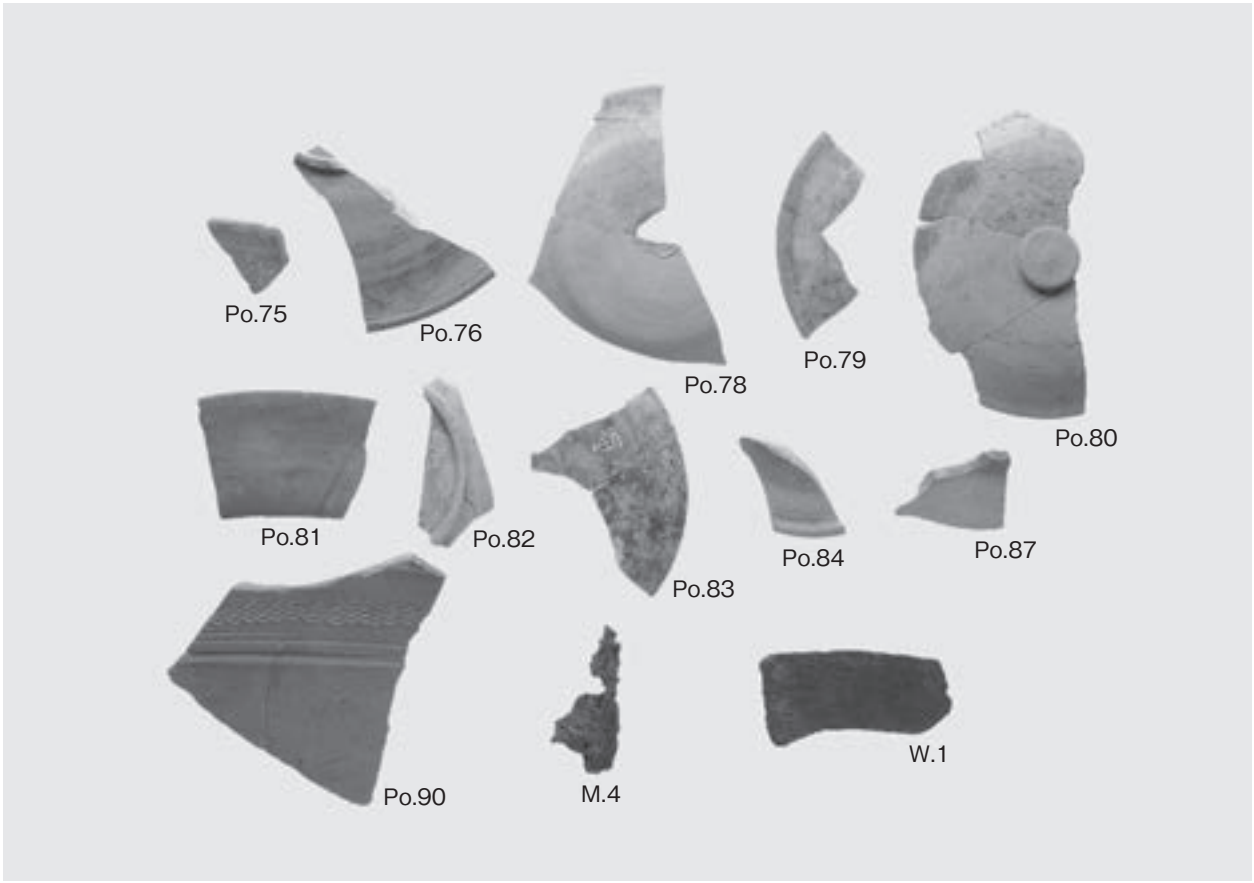


1．野上城跡Ｅ区　出土遺物表面（S＝１：３）

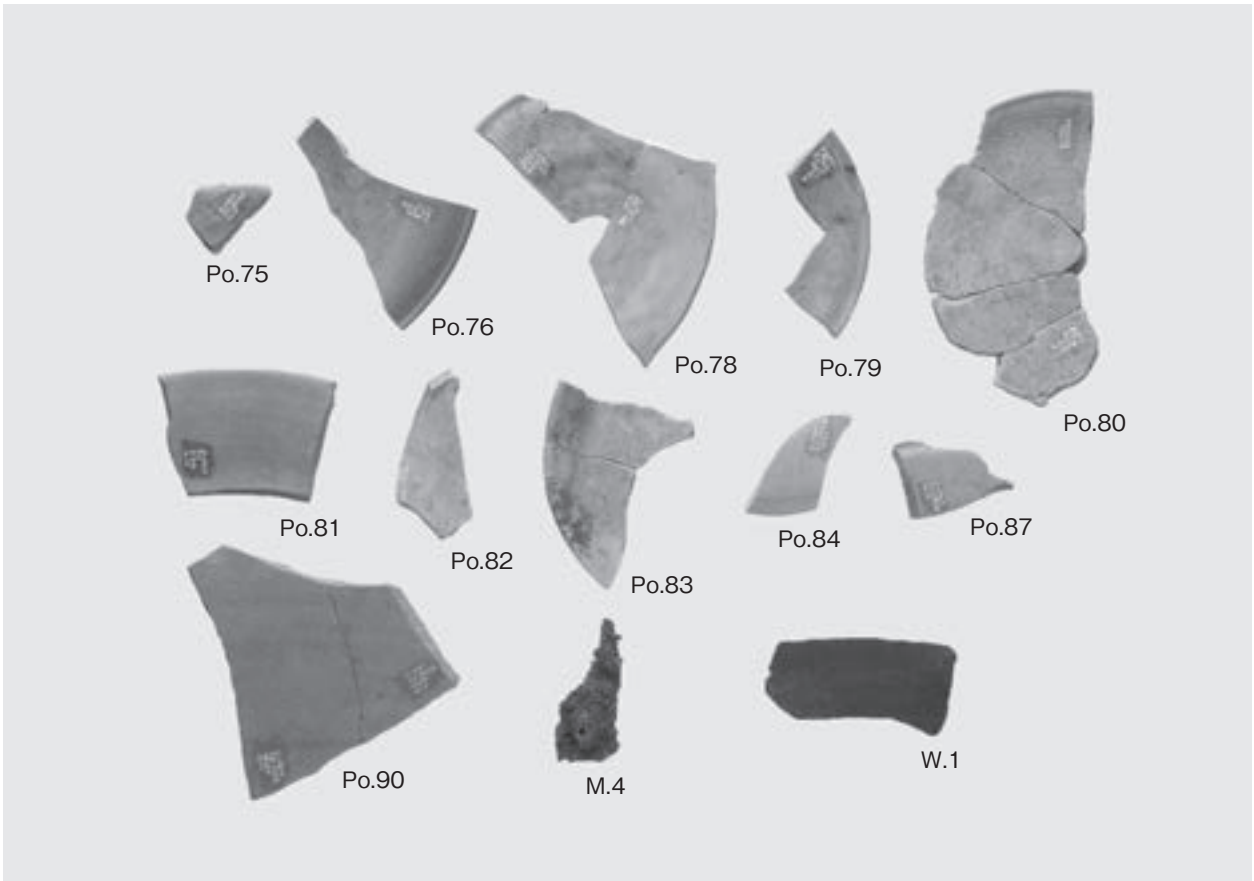


2．野上城跡Ｅ区　出土遺物裏面（S＝１：３）

写真図版22



1．野上城跡Ｅ区　土坑１出土遺物表面（S＝１：３）



2．野上城跡Ｅ区　土坑１出土遺物裏面（S＝１：３）

Po.77

Po.80

Po.85

Po.86

Po.88

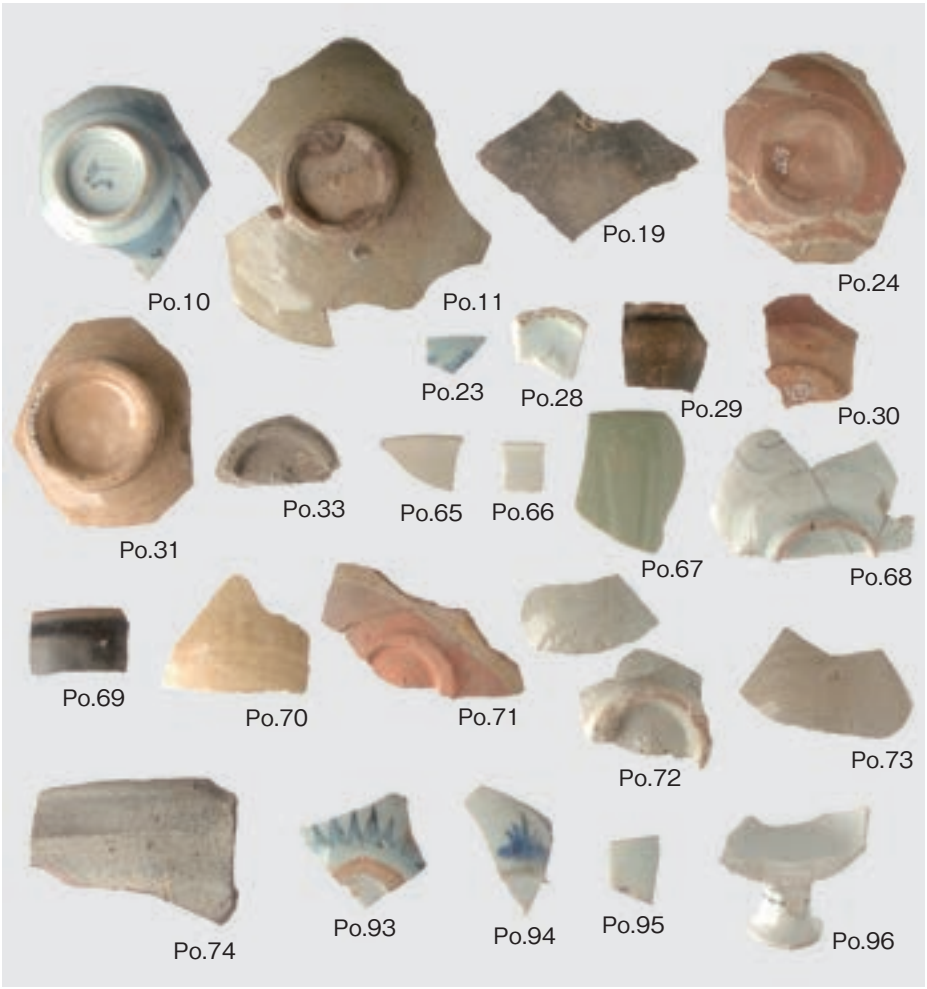
Po.89

1．野上城跡Ｅ区　土坑１出土遺物①（S＝１：３）

1．野上城跡Ｅ区　土坑１出土遺物②（S＝１：４）

１．三部長龍寺谷タタラ跡　排滓場出土大形鉄滓（写真中央の鉄滓の横幅は30㎝）

２．三部長龍寺谷タタラ跡　排滓場出土小形鉄滓（写真右下の鉄滓の横幅は８㎝）



1．野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡　出土陶磁器表面（S＝１：３）

2．野上城跡Ｅ区　古墓３出土石鏃（S＝１：１）

3．野上城跡Ｅ区　出土砥石（S＝１：１）

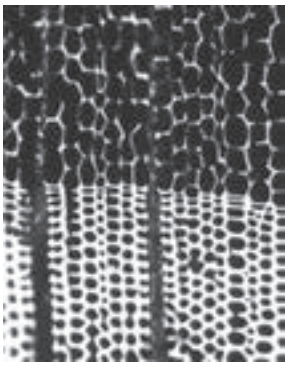
1．野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡　出土陶磁器裏面（S＝１：３）

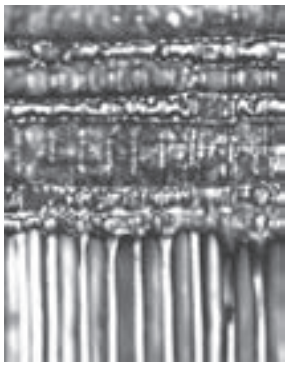
G.1

2．三部長龍寺谷タタラ跡　排滓場出土牛乳瓶（S＝１：２）

写真図版28

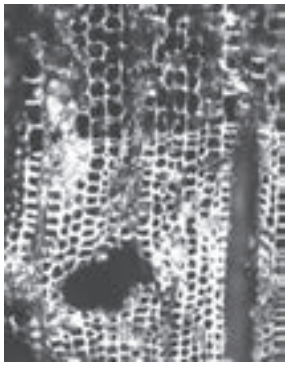
三部長龍寺谷タタラ跡出土炭化材（落射顕微鏡写真）

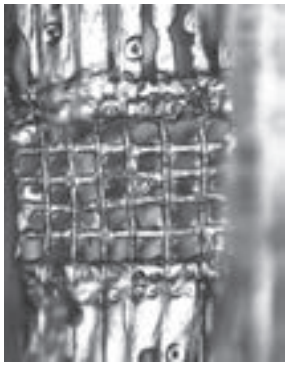




サンプル①:7.19g　横断面 ——：0.1㎜　放射断面 ——：0.05㎜　接線断面 ——：0.1㎜

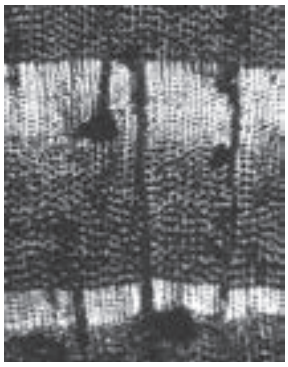
アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.





サンプル②:13.43g　横断面 ——：0.1㎜　放射断面 ——：0.05㎜　接線断面 ——：0.1㎜

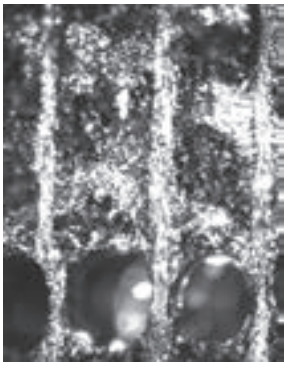
アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.



サンプル③:4.32g　横断面 ——：0.2㎜　放射断面 ——：0.1㎜　接線断面 ——：0.1㎜

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.

野上城跡出土炭化材（落射顕微鏡写真）



サンプル④:0.95g　横断面 ——：0.2㎜　放射断面 ——：0.2㎜　接線断面 ——：0.2㎜

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino

報 告 書 抄 録

ふ り が な	のがみじょうせき・さんぶちょうりゅうじだにたたらあと
書　　名	野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	３
編 著 者 名	佐伯純也
編 集 機 関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　TEL・FAX　0859-26-0455 eメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発 行 年 月 日	西暦2014年３月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野上城跡	西伯郡伯耆町三部字古城山	31390	17	35度24分45秒	133度19分52秒	平成24年６月25日～平成24年９月31日	1,000㎡	砂防堰堤工事
三部長龍寺谷タタラ跡	西伯郡伯耆町三部字長竜寺谷	31390	128	35度24分45秒	133度19分52秒	平成24年８月23日～平成24年９月31日		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野上城跡	城館跡	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世・近世	郭、古墓、礫群、土坑	縄紋土器、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石鏃、砥石、金属製品、炭化材	
三部長龍寺谷タタラ跡	生産遺跡	中世 近世	排滓場	磁器、牛乳瓶、鉄滓、炉壁	

要　約

野上城跡は中世の城郭遺跡である。今回の調査では、城の裾部を調査したのみで明確な遺構は検出出来なかったが、Ｃ・Ｅ区では郭状の遺構が盛土によって造成されており、城郭構造の一端を示す資料を得た。また、Ｄ区において石組の古墓が検出されたほか、Ｅ区の平坦地からは土坑内から須恵器片が多く出土しており、野上城の築城以前にも古代の遺構が存在したものと考えられた。

長龍寺谷タタラ跡は、鉄生産に伴い廃棄された排滓場を調査した。排滓場の範囲は高さ３ｍに達しており、製鉄に伴い大量の廃棄物が生じていたことが判明した。操業時期については、幕末頃のものと考えられるが、文献資料が無く、どのような経営がなされていたのかは不明である。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書３

鳥取県西伯郡伯耆町

野上城跡・三部長龍寺谷タタラ跡

２０１４年3月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９―２６―０４５５

印　　刷　　勝 美 印 刷 株 式 会 社